

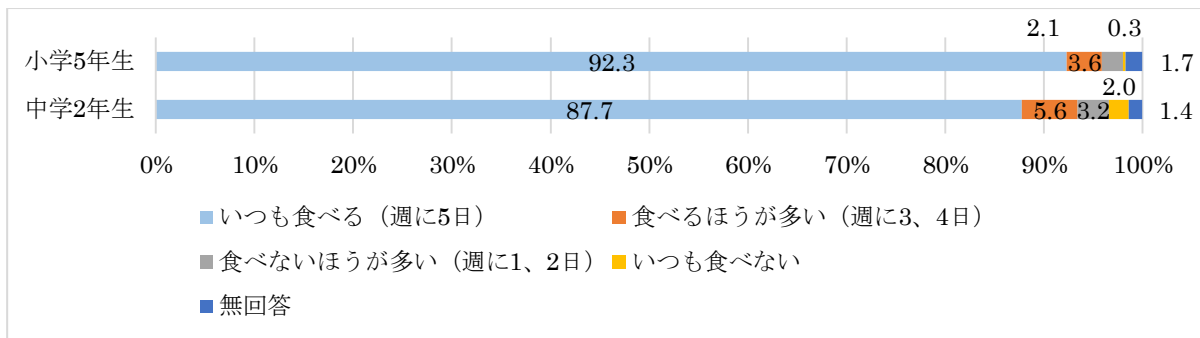
# 第4章 子どもの生活

## 1. 子どもの食

### (1) 朝食をとる頻度

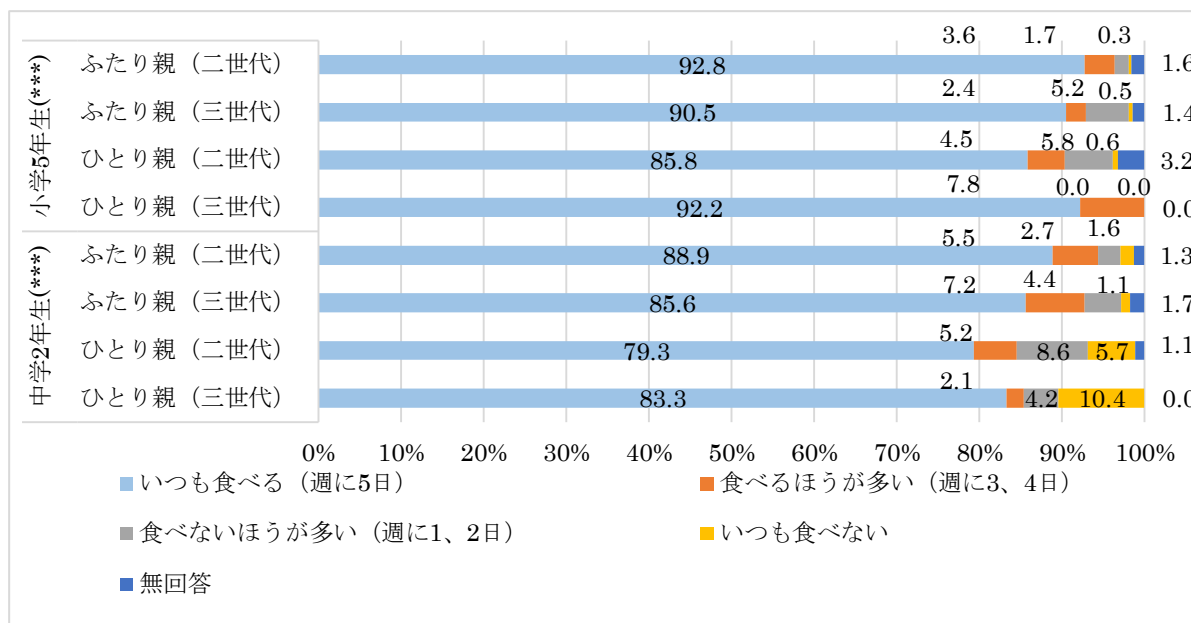
本調査では、子どもの食生活の状況を把握するために、子ども本人に平日に朝食をとる頻度について訊いている。その結果、小学5年生の92.3%、中学2年生の87.7%が「いつも食べる（週に5日）」と答えた。「食べる方が多い（週に3、4日）」と答えたのは小学5年生では3.6%、中学2年生では5.6%であった。「食べない方が多い（週に1、2日）」は小学5年生では2.1%、中学2年生では3.2%、「いつも食べない」は小学5年生では0.3%、中学2年生では2.0%であった。総じて、中学2年生の方が朝食をとる頻度が低い。

図表 4-1-1 平日に朝食をとる頻度(小学5年生、中学2年生)



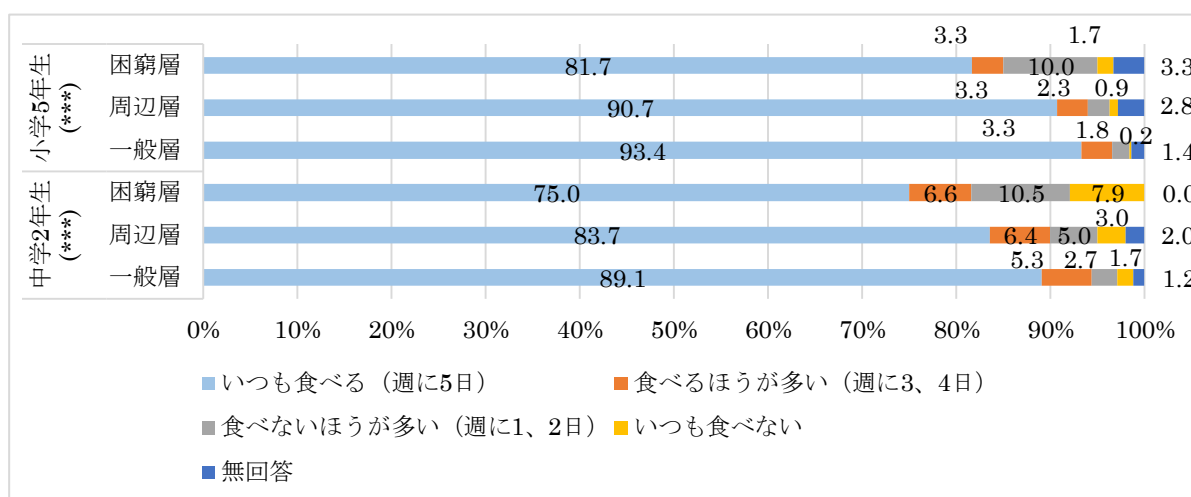
朝食をとる頻度を世帯タイプ別に見たところ、有意な差があった。具体的には、「いつも食べる」と答えた子どもの割合が、小学5年生ではふたり親（二世帯）世帯は92.8%、ふたり親（三世帯）世帯は90.5%、ひとり親（三世帯）世帯は92.2%であるのに対し、ひとり親（二世帯）世帯は85.8%であり、中学2年生ではふたり親（二世帯）世帯は88.9%、ふたり親（三世帯）世帯は85.6%、ひとり親（三世帯）世帯は83.3%であるのに対し、ひとり親（二世帯）世帯は79.3%であった。両学年ともひとり親（二世帯）世帯は、他の世帯タイプより朝食をとる頻度が低い傾向にある。世帯に大人が1人しかいないことで、朝食の準備が難しい場合があると考えられる。また、小学5年生においては相対的に朝食を食べる頻度の高いひとり親（三世帯）世帯の子どもが、中学2年生においては「いつも食べない」子どもの割合が10.4%と最も高くなっている。

図表 4-1-2 平日に朝食をとる頻度(小学5年生、中学2年生):世帯タイプ別



朝食をとる頻度を生活困難度別に見たところ、有意な差があった。具体的には、「いつも食べる」と答えた子どもの割合が、小学5年生では一般層は93.4%、周辺層は90.7%であるのに対し、困窮層は81.7%である。中学2年生では一般層は89.1%、周辺層は83.7%であるのに対し、困窮層は75.0%である。両学年とも生活が困窮するほど、朝食をとる頻度が低くなる傾向がある。また、平日に朝食を「いつも食べない」と答えた子どもの割合に注目すると、中学2年生の困窮層においては7.9%にのぼる。

図表 4-1-3 平日に朝食をとる頻度(小学5年生、中学2年生):生活困難度別

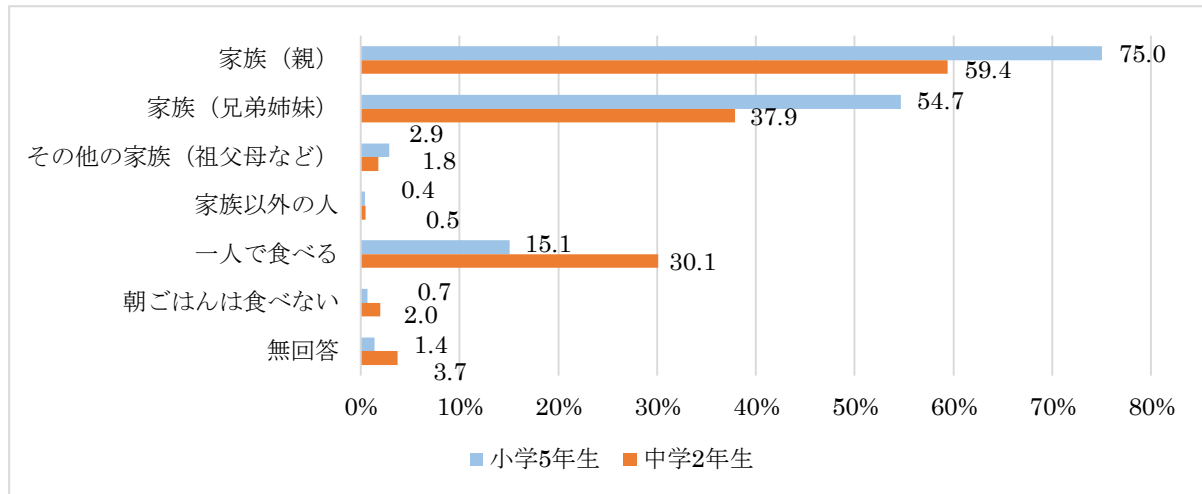


## (2) 一緒に朝食・夕食をとる人

次に、孤食の状況を見るために、子ども本人に平日と一緒に朝食をとる人を複数回答で訊いたところ、小学5年生、中学2年生ともに「家族(親)」が最も多かった(小学5年生75.0%、中

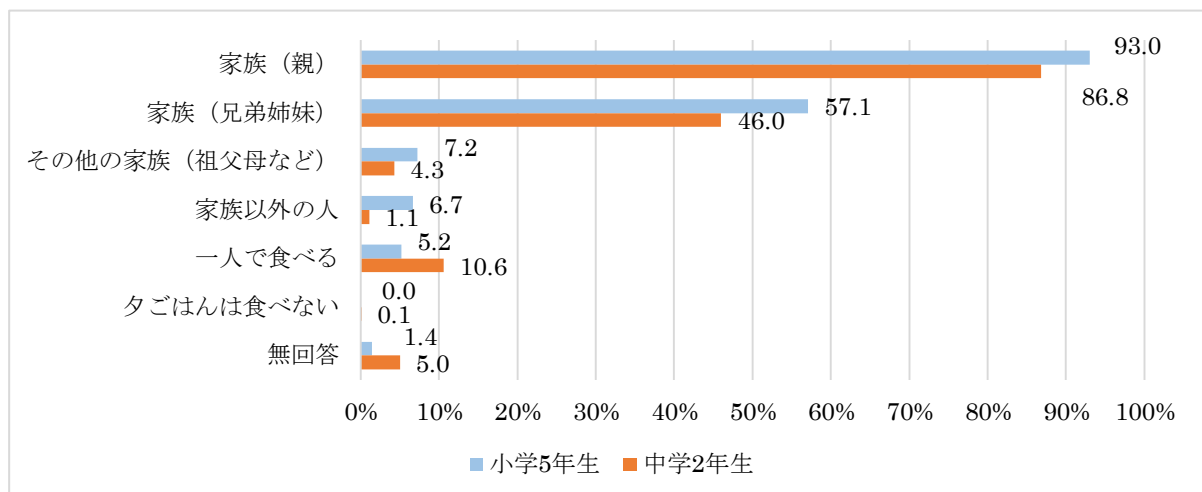
学 2 年生 59.4%)。次に「家族 (兄弟姉妹)」(小学 5 年生 54.7%、中学 2 年生 37.9%) であった。「一人で食べる」と答えた子どもは、小学 5 年生では 15.1%、中学 2 年生では 30.1%であった。

図表 4-1-4 一緒に朝食をとる人(小学 5 年生、中学 2 年生)



平日の夕食については、両学年とも「家族 (親)」(小学 5 年生 93.0%、中学 2 年生 86.8%)、「家族 (兄弟姉妹)」(小学 5 年生 57.1%、中学 2 年生 46.0%)、「その他の家族 (祖父母など)」(小学 5 年生 7.2%、中学 2 年生 4.3%) と、家族と食べる子どもが大多数を占める。しかし、「家族以外の人」(小学 5 年生 6.7%、中学 2 年生 1.1%) と答えた子どもも存在する。また、「一人で食べる」と答えた孤食の子どもは、小学 5 年生では 5.2%、中学 2 年生は 10.6%となっている。「夕ごはんは食べない」と答えた子どもはごく僅かであった (小学 5 年生 0.0%、中学 2 年生 0.1%)。

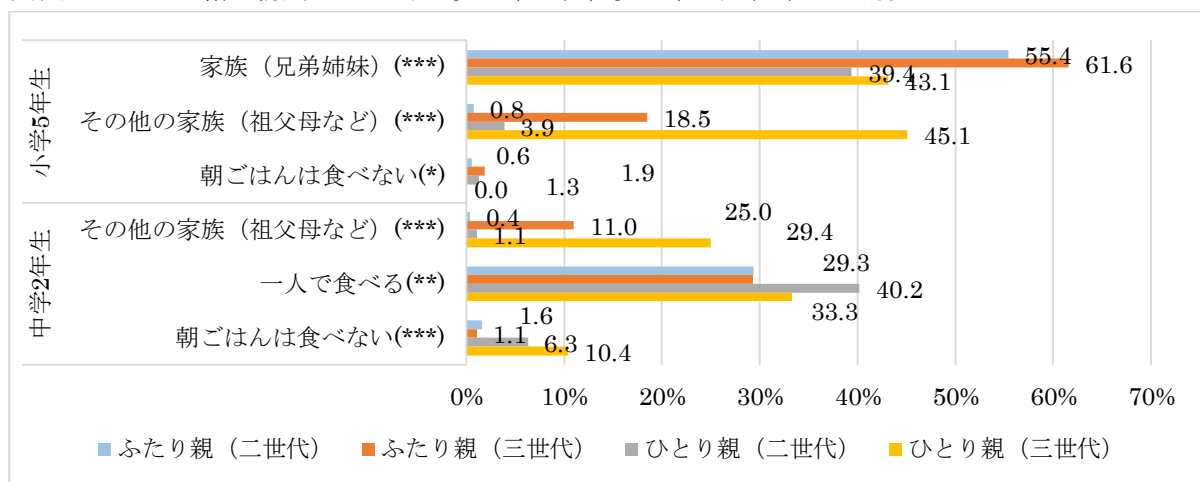
図表 4-1-5 一緒に夕食をとる人(小学 5 年生、中学 2 年生)



一緒に朝食をとる人を世帯タイプ別に見たところ、小学 5 年生では、「家族 (兄弟姉妹)」「その他の家族 (祖父母など)」「朝ご飯は食べない」、中学 2 年生では「その他の家族 (祖父母など)」

「一人で食べる」「朝ごはんは食べない」で有意な差が確認された。小学5年生においては、ふたり親世帯の子どもは、ひとり親世帯よりも兄弟姉妹と朝食をとる傾向にあるが、これはふたり親世帯の子どもの方が、兄弟姉妹数が多いことが影響していると考えられる。また、両学年において三世帯世帯の子どもが、二世帯世帯の子どもに比べ「その他の家族（祖父母など）」の割合が有意に高いが、三世帯世帯では祖父母が同居していることが考えると当然の結果と言える。さらに、小学5年生の「朝ご飯は食べない」も有意な差が確認されたが、その割合は非常に低く、ここから一貫した傾向を読み取るのは難しい。一方、中学2年生においては、「朝ご飯は食べない」「一人で食べる」に世帯タイプによる顕著な差が確認され、ひとり親世帯の子どもはふたり親世帯よりも有意にその割合が高い。

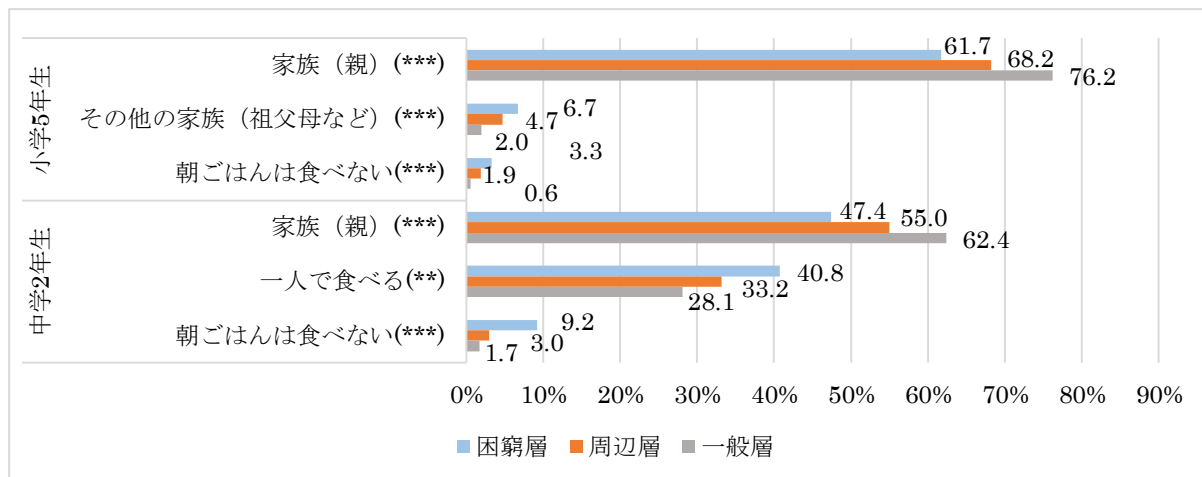
図表 4-1-6 一緒に朝食をとる人(小学5年生、中学2年生):世帯タイプ別



\*有意な結果のみ作表。

一緒に朝食をとる人の差を生活困難度別に見たところ、小学5年生では、「家族(親)」「家族(祖父母など)」「朝ごはんは食べない」、中学2年生では、「家族(親)」「一人で食べる」「朝ごはんは食べない」で有意な差が確認された。両学年とも、子どもは生活が困窮するほど朝食を食べない傾向にあり、また、親とは食べない傾向にある。小学5年生では、生活が困窮するほど祖父母と朝食を食べる傾向にあり、中学2年生では一人で食べる傾向にある。

図表 4-1-7 一緒に朝食をとる人(小学5年生、中学2年生):生活困難度別

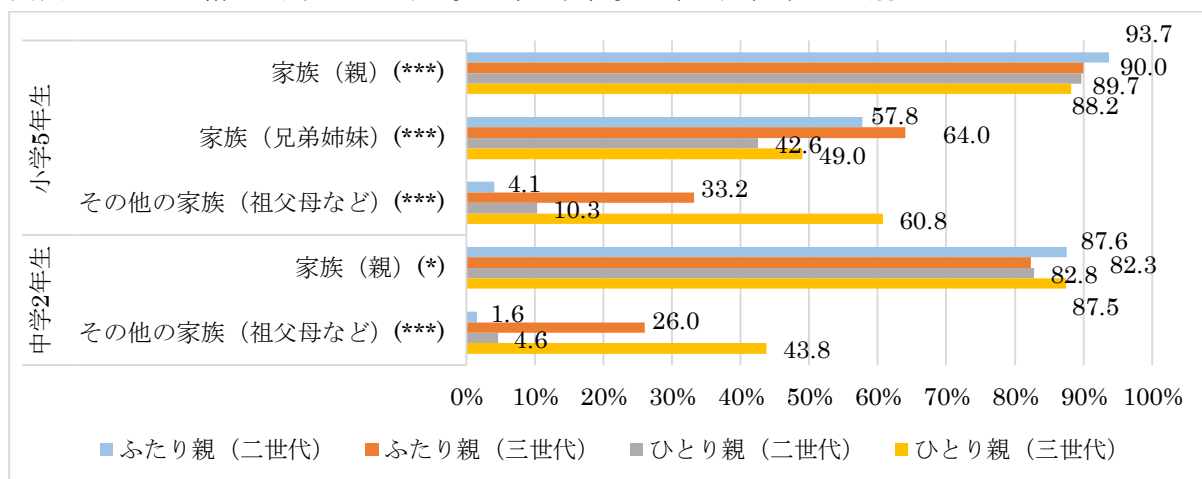


\*有意な結果のみ作表。

次に、夕食について、一緒にとる人の差を世帯タイプ別に見たところ、小学5年生では、「家族(親)」「家族(兄弟姉妹)」「その他の家族(祖父母など)」、中学2年生では、「家族(親)」「その他の家族(祖父母など)」で有意な差が確認された。「家族(親)」と夕食をとる子どもの割合は、小学5年生では、ふたり親(二世帯)世帯、ふたり親(三世帯)世帯、ひとり親(二世帯)世帯、ひとり親(三世帯)世帯の順に高いが、中学2年生においては、ふたり親(二世帯)世帯、ひとり親(三世帯)世帯、ひとり親(二世帯)世帯、ふたり親(三世帯)世帯の順に高い。

「その他の家族(祖父母など)」と夕食をとる子どもの割合は、両学年ともひとり親(三世帯)世帯、ふたり親(三世帯)世帯、ひとり親(二世帯)世帯、ふたり親(二世帯)世帯の順に高い。三世帯世帯における割合が高いのは当然だが、ひとり親(二世帯)世帯についても小学5年生では10.3%、中学2年生では4.6%の子どもが祖父母と一緒に夕食をとっている。

図表 4-1-8 一緒に夕食をとる人(小学5年生、中学2年生):世帯タイプ別

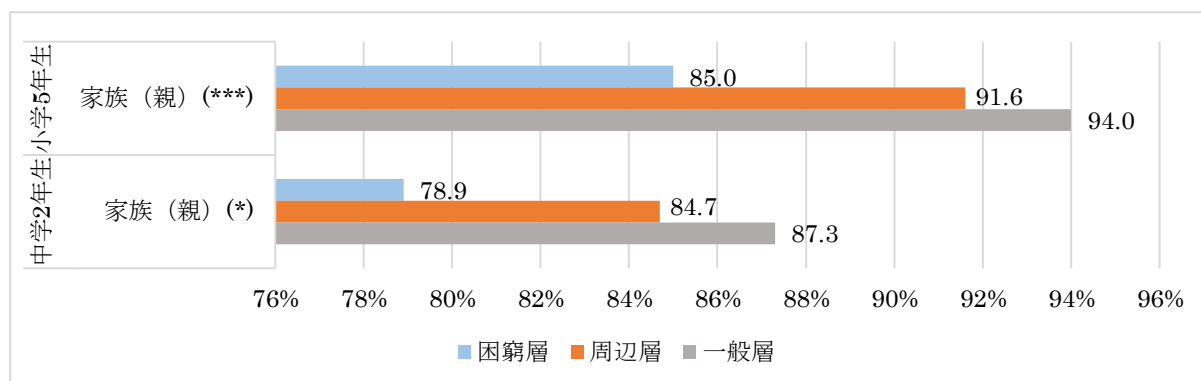


\*有意な結果のみ作表。

一緒に夕食をとる人を生活困難度別に見たところ、両学年とも「家族(親)」のみ有意な差が確

認められ、生活が困窮している世帯ほど親子が共に夕食をとらない傾向があった。朝食においても同様の傾向（図表 4-1-7）が確認されたことをふまえると、世帯の経済状況が悪化することで、親は子どもと共に食事をとることが難しくなると考えられる。

図表 4-1-9 一緒に夕食をとる人：生活困難度別（小学 5 年生、中学 2 年生）



\*有意な結果のみ作表。

### （3）食品群別の摂取頻度

子どもに、給食以外に「野菜」「果物」「肉か魚」「カップめん・インスタントめん」「コンビニのおにぎり・お弁当」「ファストフード店で買ったハンバーガーやピザなど」「お菓子」「エナジードリンク」を摂取する頻度を訊いたところ、両学年とも「野菜」と「肉か魚」については、「毎日食べる（飲む）」と答えた子どもが大多数を占めていた。「野菜」については、小学 5 年生の 76.5%、中学 2 年生の 81.9%、「肉か魚」は小学 5 年生の 63.4%、中学 2 年生の 73.5%が「毎日」と答えている。一方で、「野菜」を「1 週間に 4~5 日」「1 週間に 2~3 日」「1 週間に 1 日以下」しか摂らない、または「食べない」と答えた子どもも相当数存在し、合わせると、小学 5 年生では 22.5%、中学 2 年生では 17.3%となっている。「肉か魚」では、同様に、小学 5 年生の 34.2%、中学 2 年生の 24.8%は「1 週間に 4~5 日」以下しか食べない。

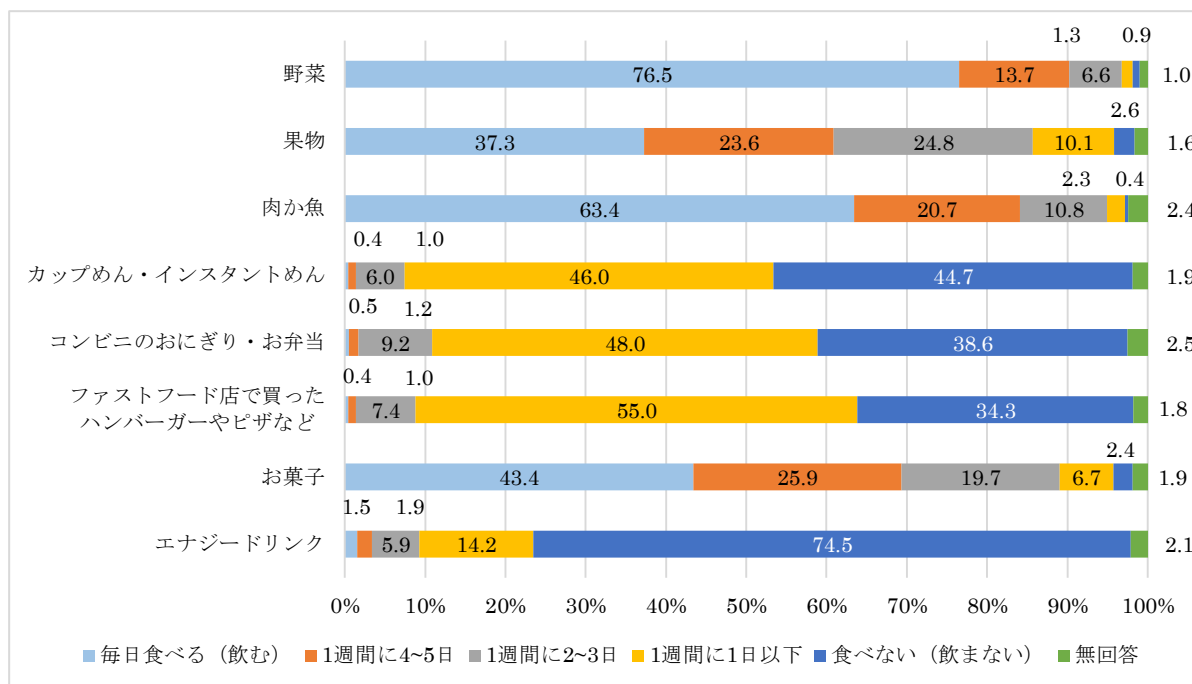
果物については、「毎日」食べる子どもは約 4 割であるが、「食べない」とした子どもも小学 5 年生の 2.6%、中学 2 年生の 4.4%となっている。

「カップめん・インスタントめん」「コンビニのおにぎり・お弁当」「ファストフード店で買ったハンバーガーやピザなど」については、両学年とも 3 割から 4 割の子どもは「食べない」と答えている一方、約 1 割の子どもが「1 週間に 2~3 日」以上食べている。

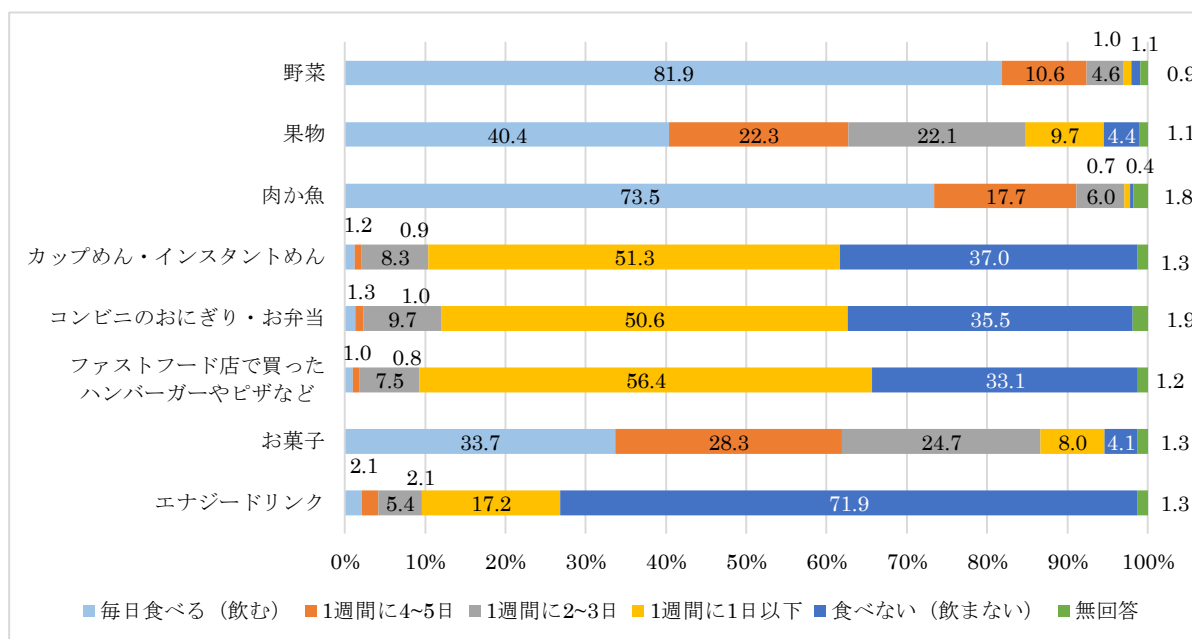
お菓子については、小学 5 年生の 43.4%、中学 2 年生の 33.7%が「毎日」食べていると答えているが、一方で、「食べない」と回答した子どももそれぞれ 2.4%、4.1%存在する。

「エナジードリンク」については両学年とも 7 割以上が「食べない（飲まない）」と回答している。

図表 4-1-10 食品群別の摂取頻度(小学 5 年生)

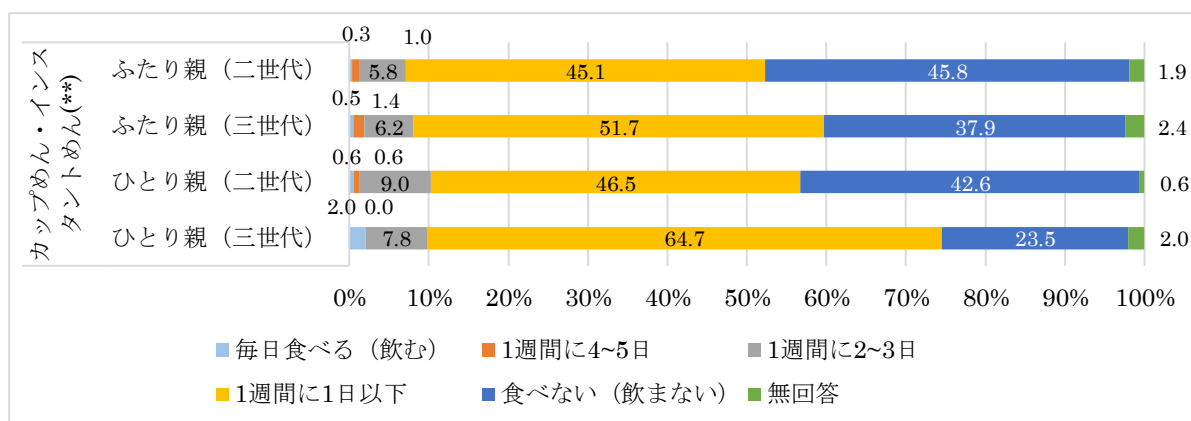


図表 4-1-11 食品群別の摂取頻度(中学 2 年生)



これら食品群別の摂取頻度の差を世帯タイプ別に見ると、小学 5 年生では「カップめん・インスタントめん」のみ有意な差が確認された。「食べない (飲まない)」の割合に注目すると、ふたり親 (二世帯) 世帯が 45.8%、ひとり親 (二世帯) 世帯が 42.6%であるのに対し、ふたり親 (三世帯) 世帯は 37.9%、ひとり親 (三世帯) 世帯は 23.5%と、三世帯世帯の方が有意に高い。

図表 4-1-12 食品群別の摂取頻度(小学 5 年生):世帯タイプ別

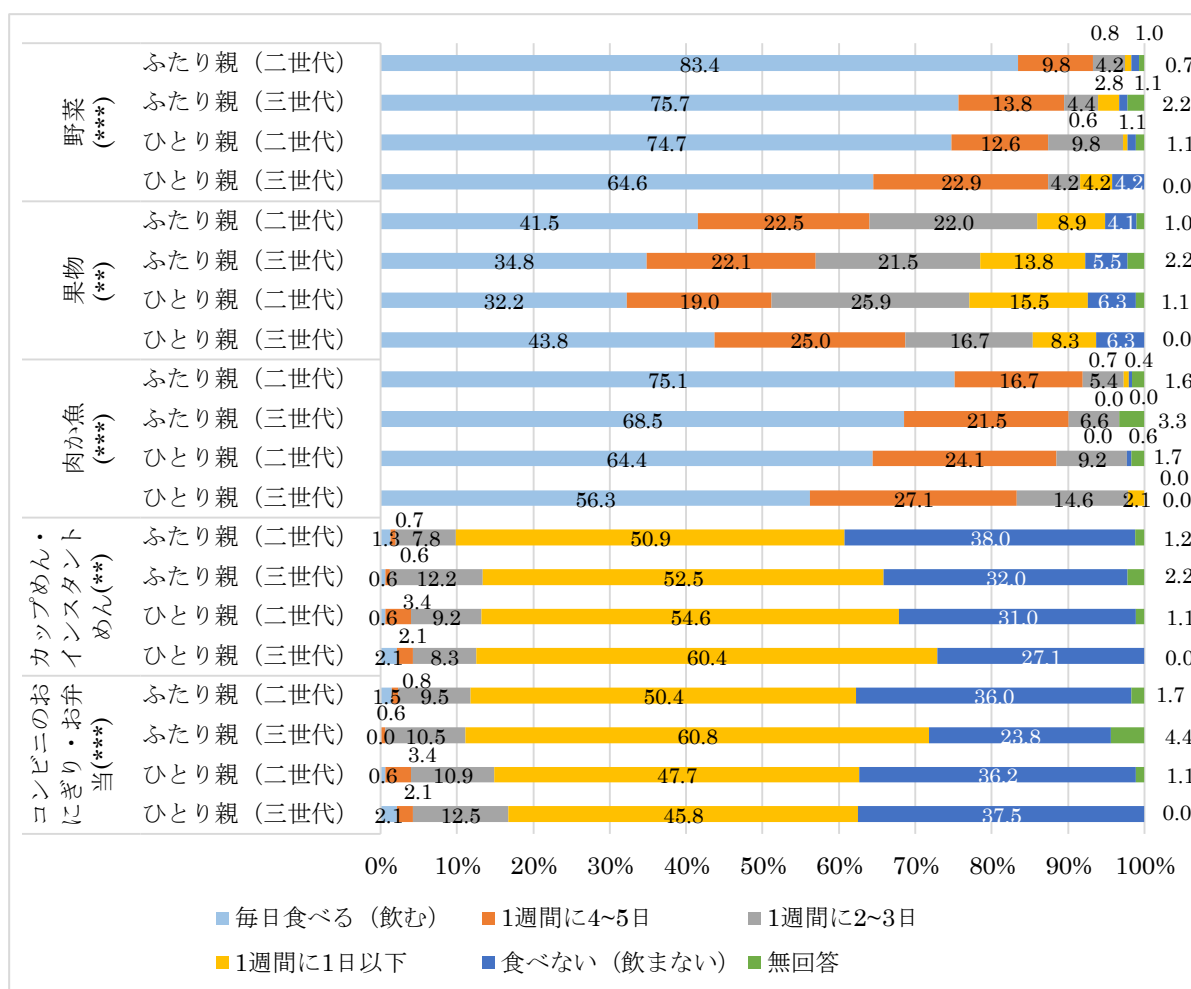


\*有意な結果のみ作表。

中学 2 年生では、「野菜」「果物」「肉か魚」「カップめん・インスタントめん」「コンビニのおにぎり・お弁当」にて有意な差が確認された。「野菜」と「肉か魚」は、「毎日食べる (飲む)」の割合がふたり親 (二世帯) 世帯において最も高く、その後、ふたり親 (三世帯) 世帯、ひとり親 (二世帯) 世帯と続き、ひとり親 (三世帯) 世帯が最も低い。「果物」の「毎日食べる (飲む)」の割合については、ひとり親 (三世帯) 世帯が最も高く、その後、ふたり親 (二世帯) 世帯、ふたり親 (三世帯) 世帯、ひとり親 (二世帯) 世帯と続く。「カップめん・インスタントめん」は、小学 5 年生と異なり、ふたり親 (二世帯) 世帯、ふたり親 (三世帯) 世帯、ひとり親 (二世帯) 世帯、ひとり親 (三世帯) 世帯の順に「食べない (飲まない)」の割合が高い。「コンビニのおにぎり・お弁当」の「食べない (飲まない)」の割合は、ひとり親 (三世帯) 世帯、ひとり親 (二世帯) 世帯、ふたり親 (二世帯) 世帯は全て 36%~38%と同程度だが、ふたり親 (三世帯) 世帯のみ 23.8%と顕著に低い。



図表 4-1-13 食品群別の摂取頻度(中学 2 年生):世帯タイプ別



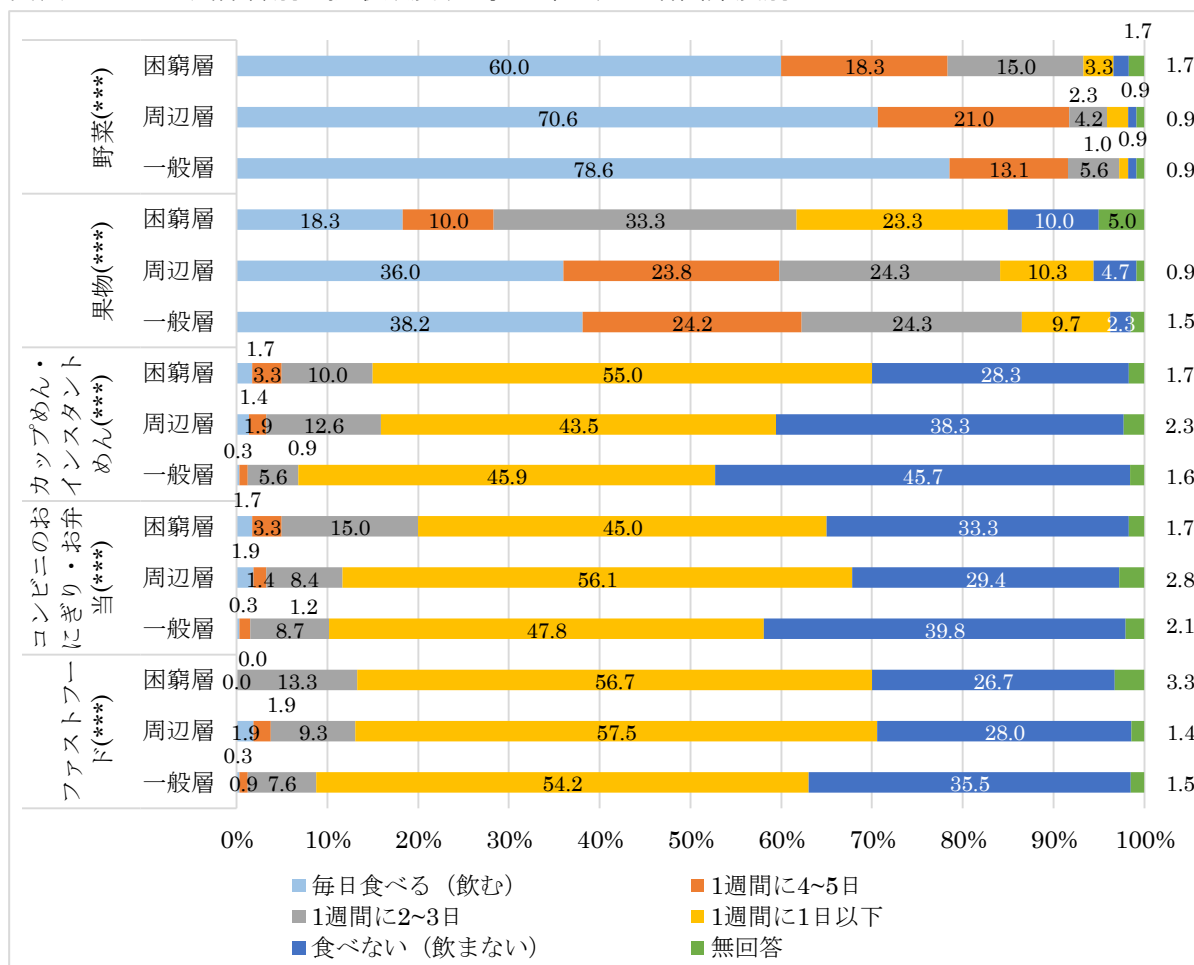
\*有意な結果のみ作表。

食品群別の摂取頻度の差を生活困難度別に見ると、小学 5 年生は「野菜」「果物」「カップめん・インスタントめん」「コンビニのおにぎり・お弁当」「ファストフード」、中学 2 年生は「野菜」「果物」「肉か魚」において有意な差が確認された。「野菜」と「果物」は両学年とも、生活が困窮するほど「毎日食べる」の割合が低下する傾向にある。困窮層においては、小学 5 年生の 20.0%、中学 2 年生の 14.5%が「1週間に 2~3 日」以下しか（給食を除いて）「野菜」を食べていない。

また、中学 2 年生の「肉か魚」も同様の傾向にある。困窮層において、「肉か魚」を「毎日」食べているのは 60.5%であり、一般層の 76.0%に比べ、15.5 ポイント低くなっている。

反対に、小学 5 年生においては、「カップめん・インスタントめん」と「ファストフード」は、生活が困窮するほど「食べない (飲まない)」の割合が低下する傾向にある。小学 5 年生の「コンビニのおにぎり・お弁当」は一般層、困窮層、周辺層の順に「食べない (飲まない)」の割合が高い。中学 2 年生においては、これらの食品群の生活困難度による差は見られない。

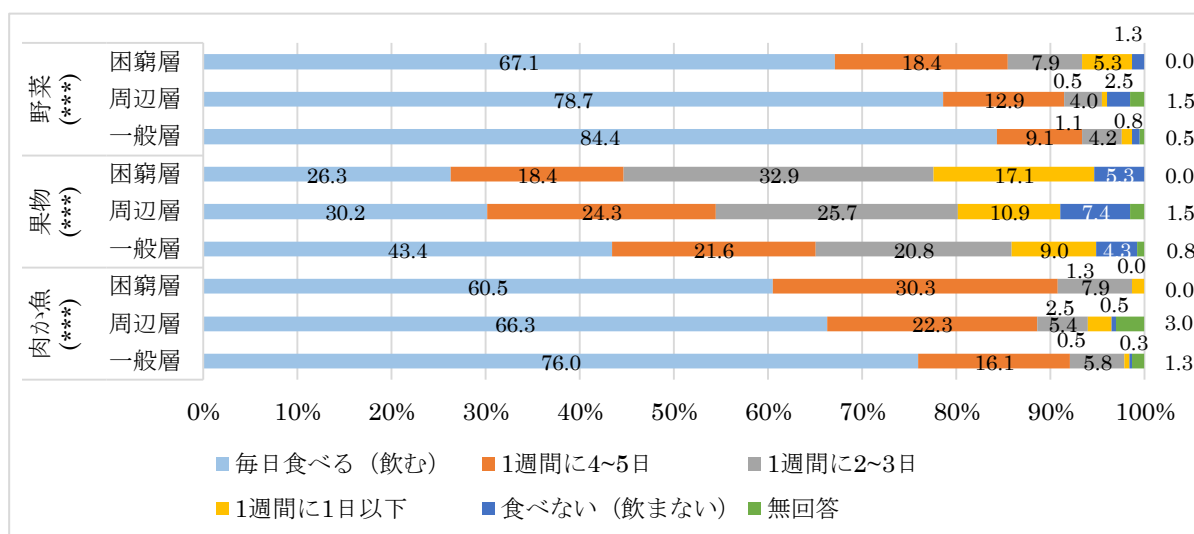
図表 4-1-14 食品群別の摂取頻度(小学 5 年生):生活困難度別



\* 「ファストフード」は「ファストフード店で買ったハンバーガーやピザなど」を表している。

\*有意な結果のみ作表。

図表 4-1-15 食品群別の摂取頻度(中学 2 年生):生活困難度別

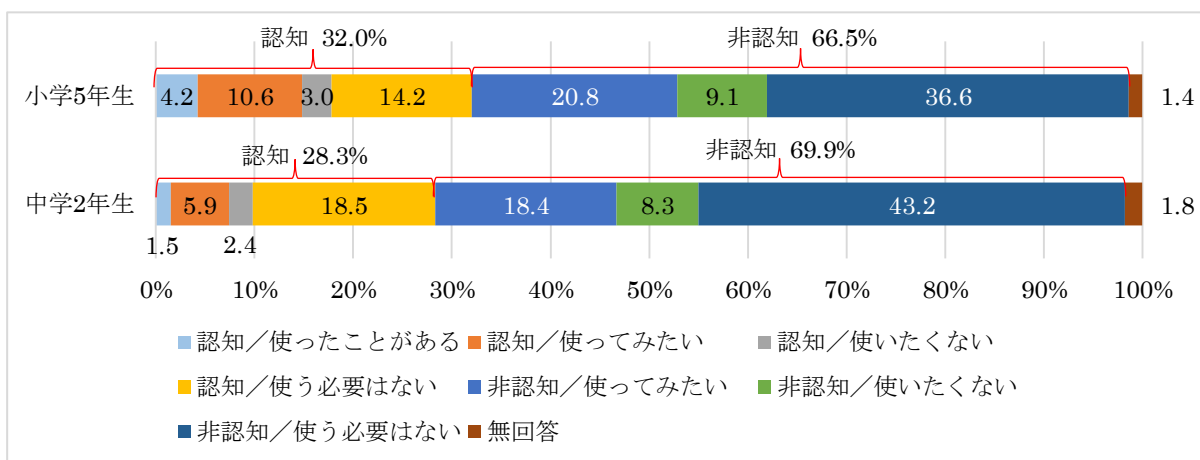


\*有意な結果のみ作表。

#### (4) 子ども食堂の利用状況

次に、子ども本人に子ども食堂の認知と利用状況について訊いた。子ども食堂を「使ったことがある」と回答したのは小学5年生では4.2%、中学2年生では1.5%であった。また、子ども食堂を認知していた子どもの割合は、小学5年生では計32.0%、中学2年生では計28.3%であった。両学年とも約3割の子どもが子ども食堂を認知しているが、利用経験のある子どもの割合は5%未満にとどまっている。ただし、「使ってみたい」と回答した子どもの割合は、小学5年生においては「認知/使ってみたい」が10.6%、「非認知/使ってみたい」が20.8%、中学2年生においては「認知/使ってみたい」が5.9%、「非認知/使ってみたい」が18.4%であり、2割から3割の子どもが子ども食堂の利用意向を持っていた。

図表 4-1-16 子ども食堂の利用状況(小学5年生、中学2年生)

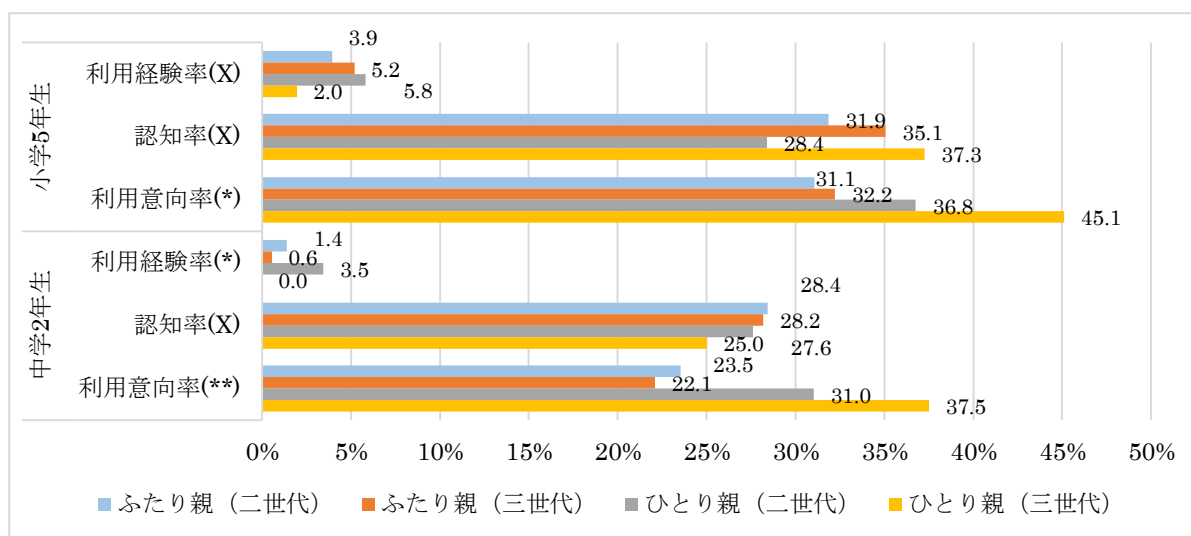


\*小学5年生は、四捨五入の関係上、「認知」「非認知」「無回答」を足し合わせても100%とならない。

子ども食堂の認知度と利用状況をより明確に表すために、「認知/使ったことがある」と答えた子どもの割合を「利用経験率」、子ども食堂を「知っている」（「認知/使ったことがある」「認知/使ってみたい」「認知/使いたくない」「認知/使う必要はない」と答えた子どもの割合を「認知率」、「使ってみたい」（「認知/使ってみたい」または「非認知/使ってみたい」と答えた子どもの割合を「利用意向率」と定義し、それぞれを世帯タイプ別、生活困難度別に集計した。

まず、世帯タイプ別に見ると、小学5年生においては利用意向率のみ、中学2年生においては利用経験率と利用意向率において有意な差が確認された。ただし、中学2年生の利用経験率はふたり親(二世帯)世帯(1.4%)、ふたり親(三世帯)世帯(0.6%)、ひとり親(二世帯)世帯(3.5%)、ひとり親(三世帯)世帯(0.0%)と非常に低く、一貫した傾向を読み取ることは難しい。他方、利用意向率は、ふたり親(二世帯)世帯(小学5年生31.1%、中学2年生23.5%)、ふたり親(三世帯)(小学5年生32.2%、中学2年生22.1%)、ひとり親(二世帯)世帯(小学5年生36.8%、中学2年生31.0%)、ひとり親(三世帯)世帯(小学5年生45.1%、中学2年生37.5%)であり、ひとり親世帯の子どもの方が利用意向を持つ傾向にある。特に両学年ともひとり親(三世帯)世帯の利用意向率の高さが目立つ。

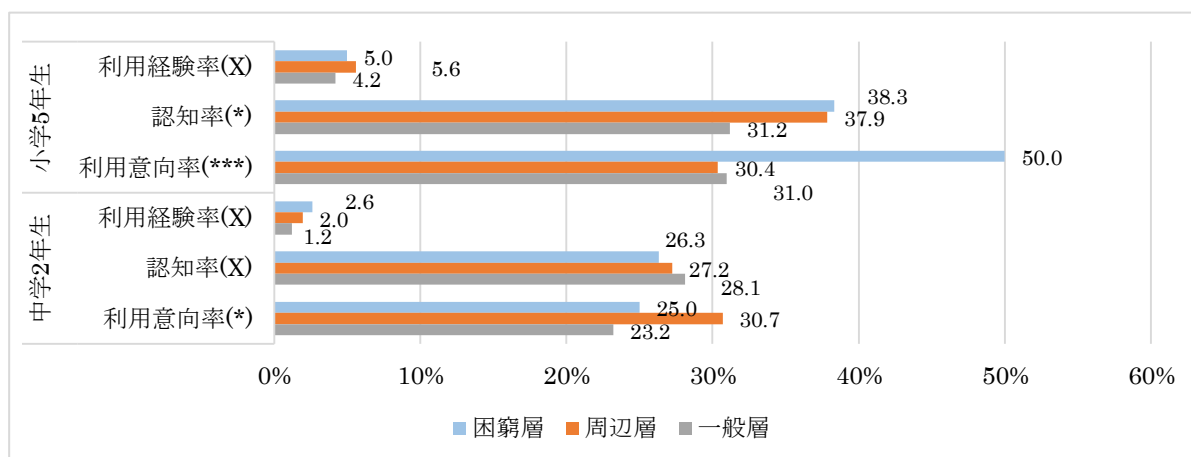
図表 4-1-17 子ども食堂の利用状況(小学 5 年生、中学 2 年生):世帯タイプ別



\*「利用経験率」は「使ったことがある」回答者とそれ以外の回答者、「認知率」は「認知」していた回答者とそれ以外の回答者、「利用意向率」は「使ってみたい」回答者とそれ以外の回答者の割合について検定している。このため、合算した値の四捨五入の関係上、付表の値と一致しない場合がある。

生活困難度別に見ると、小学 5 年生では、子ども食堂の認知率と利用意向率において、中学 2 年生では利用意向率においてのみ有意な差が確認された。小学 5 年生の子ども食堂の認知率は、困窮層 38.3%、周辺層 37.9%、一般層 31.2%であり、生活が困窮している層ほど認知率が高い。利用意向率は、小学 5 年生では困窮層 50.0%、周辺層 30.7%、一般層 31.0%と、困窮層の利用意向率が突出して高い。ただし、中学 2 年生においては、困窮層 25.0%、周辺層 30.7%、一般層 23.2%であり、周辺層の利用意向率が最も高い。

図表 4-1-18 子ども食堂の利用状況(小学 5 年生、中学 2 年生):生活困難度別



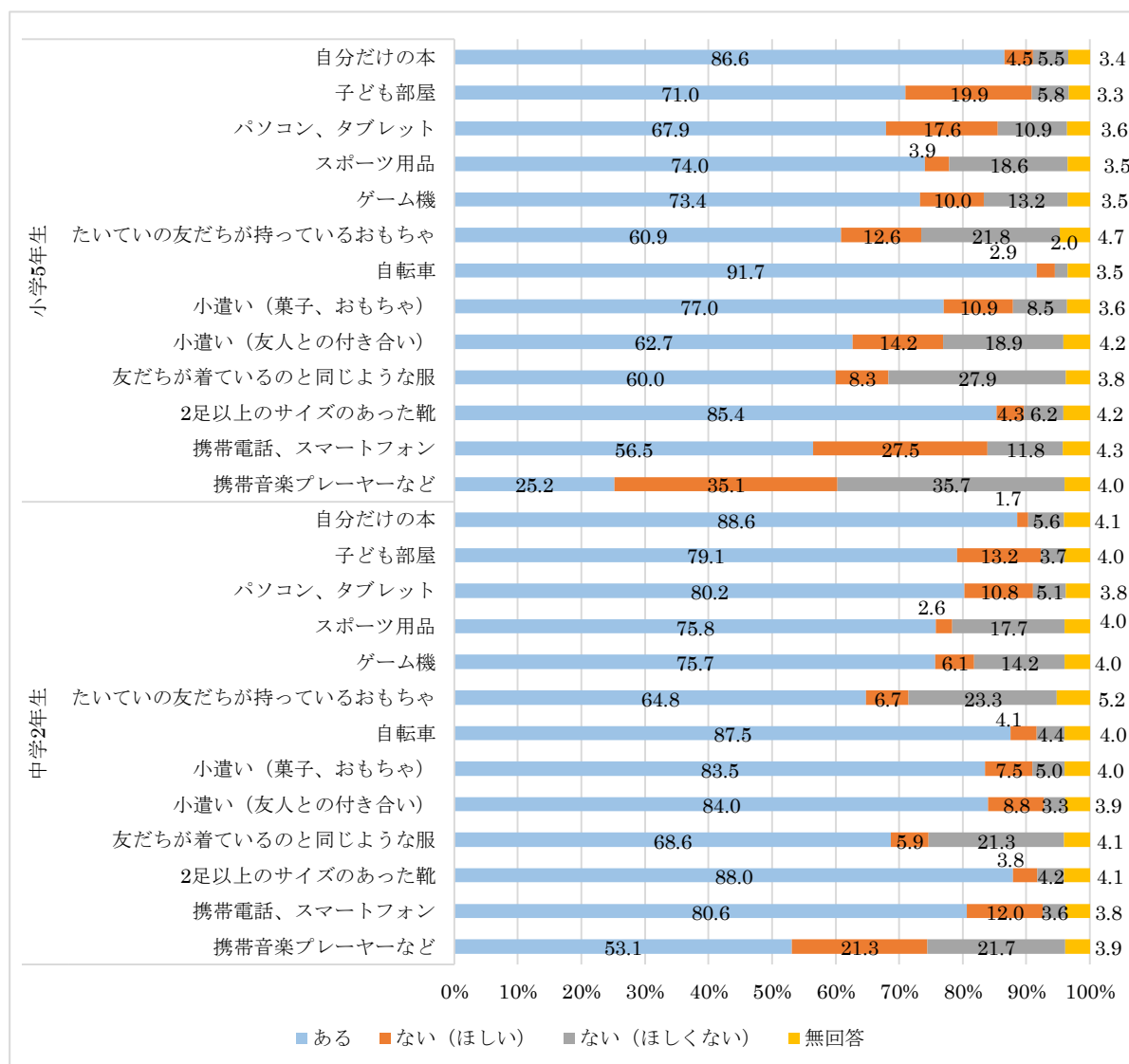
\*「利用経験率」は「使ったことがある」回答者とそれ以外の回答者、「認知率」は「認知」していた回答者とそれ以外の回答者、「利用意向率」は「使ってみたい」回答者とそれ以外の回答者の割合について検定している。このため、合算した値の四捨五入の関係上、付表の値と一致しない場合がある。

## 2. 子どもの所有物

子ども本人に、現在の日本において多くの子どもが所有している物品等について、「ある」「ない（欲しい）」「ない（ほしくない）」の選択肢で所有状況を訊いた。ここでは、特に「ない（欲しい）」の割合に注目する。両学年ともに「携帯音楽プレーヤー」（小学5年生 35.1%、中学2年生 21.3%）、「携帯電話、スマートフォン」（小学5年生 27.5%、中学2年生 12.0%）、インターネットに接続できる「パソコン、タブレット」（小学5年生 17.6%、中学2年生 10.8%）といった電子機器について、「ない（欲しい）」と回答している子どもの割合が高い。他にも「子ども部屋」について「ない（欲しい）」と答えた子どもも小学5年生の 19.9%、中学2年生の 13.2%にのぼる。

また、「小遣い（菓子、おもちゃ）」（小学5年生 10.9%、中学2年生 7.5%）、「小遣い（友人との付き合い）」（小学5年生 14.2%、中学2年生 8.8%）を欲しいけれどももらえていない子どもも一定の割合でいる。「たいていの友だちが持っているおもちゃ」（小学5年生 12.6%、中学2年生 6.7%）、「友だちが着ているのと同じような服」（小学5年生 8.3%、中学2年生 5.9%）等も含め、子ども自身が形成する交友関係の中での様々な物の所有状況の格差を示していると考えられる。

図表 4-2-1 子どもの様々な物の所有状況(小学5年生、中学2年生)



\*「自分だけの本」は学校の教科書やマンガは除く。「子ども部屋」は兄弟姉妹と使っている場合も含む。パソコン、タブレットはインターネットに接続できる物に限る。調査票では「小遣い（菓子、おもちゃ）」は「おやつや、ちょっとしたおもちゃを買うおこづかい」「小遣い（友人との付き合い）」は「友だちと遊びに行くための交通費やおこづかい」と表記。

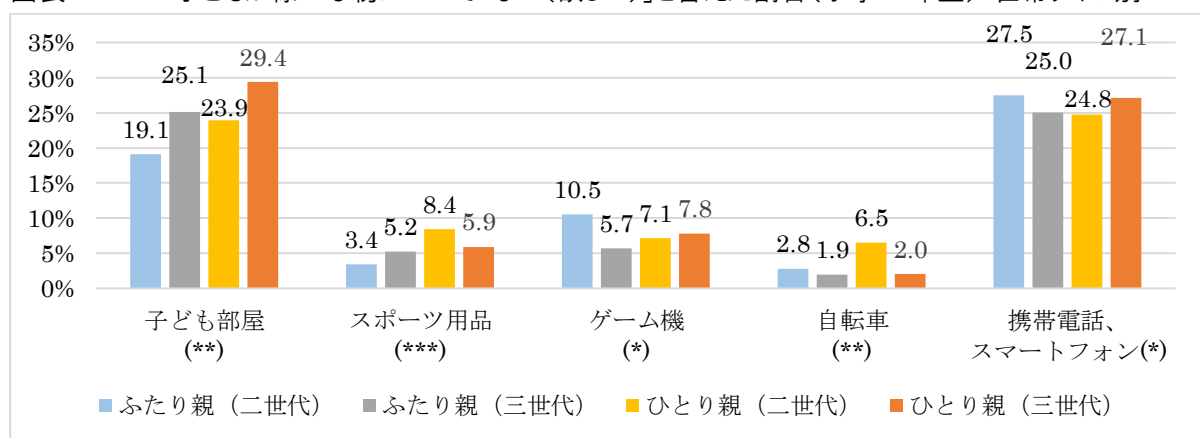
「ない（欲しい）」の割合を世帯タイプ別に見ると、小学5年生では、「子ども部屋」「スポーツ用品」「ゲーム機」「自転車」「携帯電話、スマートフォン」において、中学2年生では「子ども部屋」「スポーツ用品」「小遣い（菓子、おもちゃ）」において、有意な差が確認された。小学5年生の「子ども部屋」について「ない（欲しい）」と答えた子どもの割合は、ふたり親（二世帯）世帯において19.1%と最も低く、続いてひとり親（二世帯）世帯（23.9%）、ふたり親（三世帯）世帯（25.1%）となる。最も割合が高かったのが、ひとり親（三世帯）世帯の29.4%だった。他方、中学2年生の「子ども部屋」は、ひとり親（三世帯）世帯が12.5%、ふたり親（二世帯）世帯が12.6%であるのに対し、ふたり親（三世帯）世帯が17.7%、ひとり親（二世帯世帯）が17.8%であった。両学年とも、ふたり親（二世帯）世帯において子ども部屋が「ない（欲しい）」と答えた子どもの割合が相対的に低く、ふたり親（三世帯）世帯、ひとり親（二世帯）世帯がそれよりも高い点は共通しているが、ひとり親（三世帯）世帯の傾向は大きく異なる。

「スポーツ用品」について「ない（欲しい）」と回答した子どもの割合は、小学5年生のふたり親（二世帯）世帯が3.4%なのに対し、ふたり親（三世帯）世帯（5.2%）、ひとり親（三世帯）世帯（5.9%）、ひとり親（二世帯）世帯（8.4%）は有意に高い割合を示している。中学2年生においても、ふたり親（二世帯）世帯の割合が最も低く、それ以外の世帯タイプの割合が有意に高い。

小学5年生の「ゲーム機」については、ふたり親（二世帯）世帯において「ない（欲しい）」と答えた子どもの割合が最も高かった。小学5年生の「自転車」については、ひとり親（二世帯）世帯における割合が最も高かった。「携帯電話、スマートフォン」については、ふたり親（二世帯）世帯とひとり親（三世帯）世帯における割合が相対的に高かった。

中学2年生の「小遣い（菓子、おもちゃ）」については、ふたり親（三世帯）世帯における割合が最も低く、ひとり親（三世帯）世帯における割合が最も高かった。

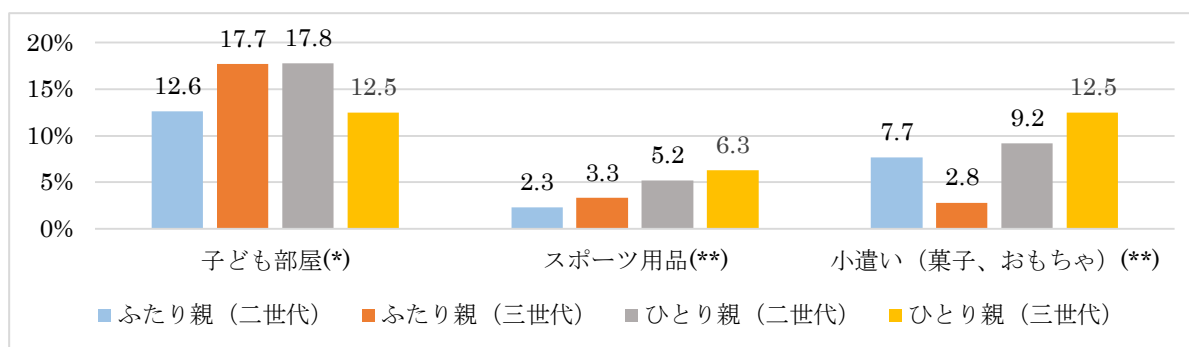
図表 4-2-2 子どもが様々な物について「ない(欲しい)」と答えた割合(小学5年生):世帯タイプ別



\*「ない（欲しい）」とそれ以外に分類した上で、検定を行っているため、検定結果が付表と一致しないことがある。

\*有意な結果のみ作表。

図表 4-2-3 子どもが様々な物について「ない(欲しい)」と答えた割合(中学 2 年生):世帯タイプ別

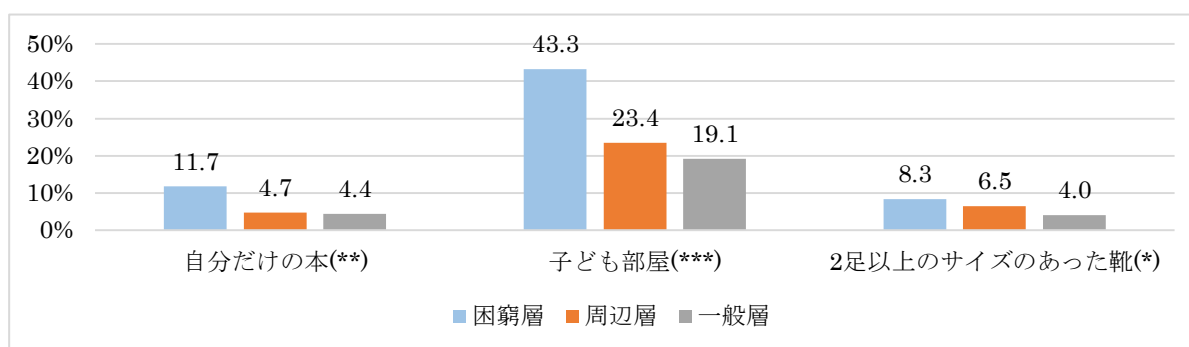


\* 「ない (欲しい)」とそれ以外に分類した上で、検定を行っているため、検定結果が付表と一致しないことがある。

\*有意な結果のみ作表。

生活困難度別に様々な物について「ない (欲しい)」と答えた子どもの割合を見ると、小学 5 年生では「自分だけの本」「子ども部屋」「2 足以上のサイズのあった靴」において有意な差が確認された。「自分だけの本」について「ない (欲しい)」と答えた子どもの割合は、一般層 (4.4%)、周辺層 (4.7%) だったのに対し、困窮層は 11.7%であり、その割合の高さが目立つ。「子ども部屋」も同様の傾向にあり、一般層 (19.1%)、周辺層 (23.4%) に対し、困窮層は 43.3%にのぼる。また、「2 足以上のサイズのあった靴」については、一般層 (4.0%)、周辺層 (6.5%)、困窮層 (8.3%) であった。

図表 4-2-4 子どもが様々な物について「ない(欲しい)」と答えた割合(小学 5 年生):生活困難度別



\* 「ない (欲しい)」とそれ以外に分類した上で、検定を行っているため、検定結果が付表と一致しないことがある。

\*有意な結果のみ作表。

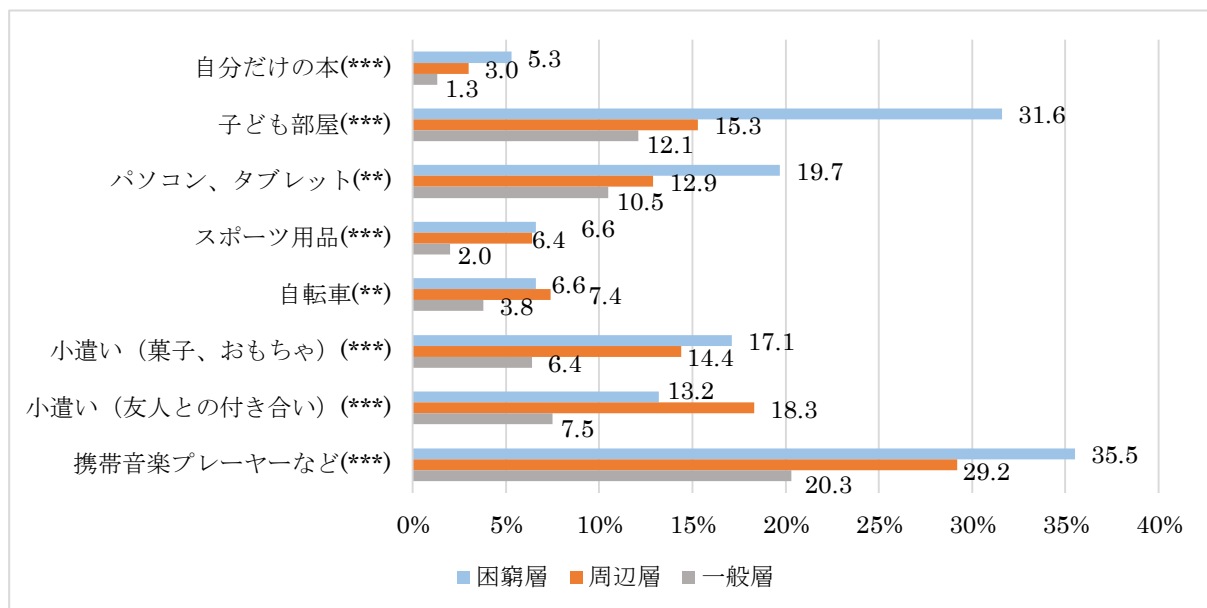
中学 2 年生は小学 5 年生よりも多くの項目で生活困難度による有意な差が確認された。具体的には、小学 5 年生でも生活困難度による格差が確認された「自分だけの本」「子ども部屋」以外にも、「パソコン、タブレット」「スポーツ用品」「自転車」「小遣い (菓子、おもちゃ)」「小遣い (友人との付き合い)」「携帯音楽プレーヤーなど」において有意な差が確認された。特に困窮層とその他の層の格差が目立つのが、小学 5 年生同様、「子ども部屋」である。困窮層において子ども部屋が「ない (欲しい)」と答えた割合は 31.6%にのぼるが、周辺層においては 15.3%、一般層にお

いては 12.1%である。このように両学年とも住宅環境に生活困難度の影響が如実に出る背景には、世田谷区の地価ならびに家賃の高さがあるだろう。他には「パソコン、タブレット」も一般層 (10.5%)、周辺層 (12.9%) に対し、困窮層 (19.7%) と大きな差がある。

これら困窮層とその他の層との格差が目立つ項目に対し、「スポーツ用品」「自転車」「小遣い (菓子、おもちゃ)」「小遣い (友人との付き合い)」については、困窮層、周辺層が同程度の状況である一方、一般層における「ない (欲しい)」の割合が相対的に低いという傾向にある。ただし、「小遣い (友人との付き合い)」については困窮層よりも周辺層の方が「ない (欲しい)」と答えた子どもの割合が高い。

なお、困窮層において「ない (欲しい)」の割合が最も高いのは「携帯音楽プレーヤー」(困窮層 35.5%) であるが、他の項目と比べると周辺層 (29.2%)、一般層 (20.3%) においてもその割合は相対的に高い。また、「自分だけの本」も生活が困窮するほど「ない (欲しい)」と答える子どもの割合が高くなるが、困窮層におけるその割合は 5.3%であり、小学 5 年生の困窮層における割合 (11.7%) の半分以下である。ただし、「ない (欲しくない)」と答えた者の割合は、小学 5 年生の困窮層では 6.7%であるのに対し、中学 2 年生の困窮層では 11.8%であり、「自分だけの本」に関して、小学 5 年生よりも中学 2 年生の方が生活困難度による格差が小さいとは必ずしも言えない。むしろ、この結果は中学 2 年生の困窮層の読書意欲や読書習慣の相対的な弱さを示している可能性がある。

図表 4-2-5 子どもが様々な物について「ない(欲しい)」と答えた割合(中学 2 年生):生活困難度別



\* 「ない (欲しい)」とそれ以外に分類した上で、検定を行っているため、検定結果が付表と一致しないことがある。

\*有意な結果のみ作表。



### 3. 子どもの日常的な活動

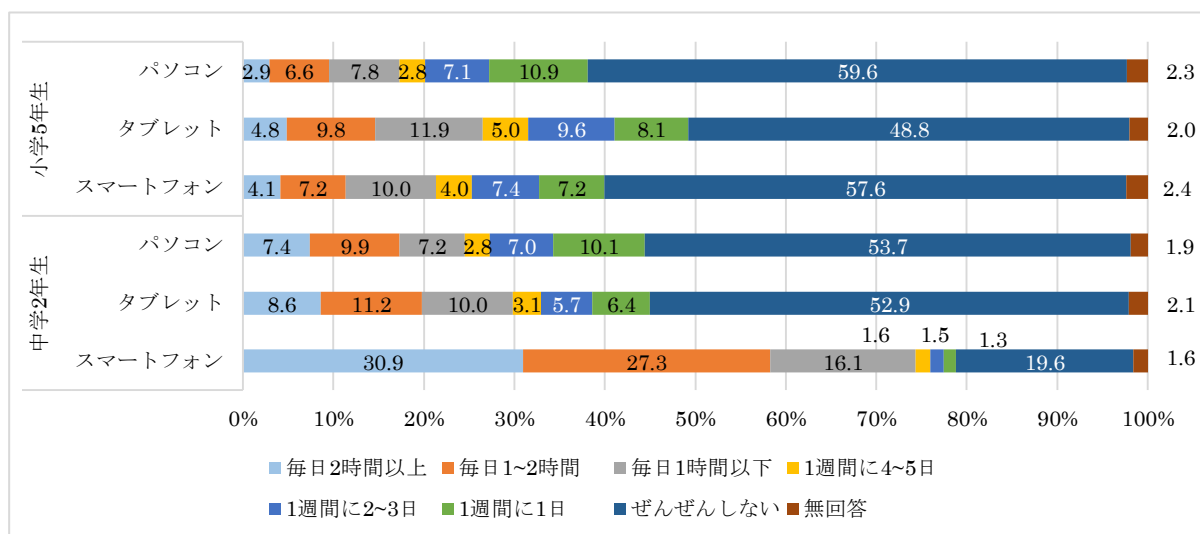
#### (1) 情報機器の利用

本節では、子どもたちが日常的にどのような活動を行っているかを、「情報機器の利用」「屋内での活動」「屋外での活動」「家事・家族の世話」の4つの視点から見ていく。

「あなたは、以下の活動を、ふだんどれくらいしますか」との問いにて、子ども本人に「パソコン」「タブレット」の利用時間を訊いたところ、「ぜんぜんしない」と回答した者の割合は「パソコン」小学5年生 59.6%、中学2年生 53.7%、「タブレット」小学5年生 48.8%、中学2年生 52.9%であった。約半数の子どもたちが「パソコン」「タブレット」を利用していないものの、残りの約半数は少なくとも「1週間に1日」以上これら情報機器に触れている。「スマートフォン」については、小学5年生は 57.6%が「ぜんぜんしない」と答えているが、中学2年生においてはこの割合は 19.6%にとどまる。

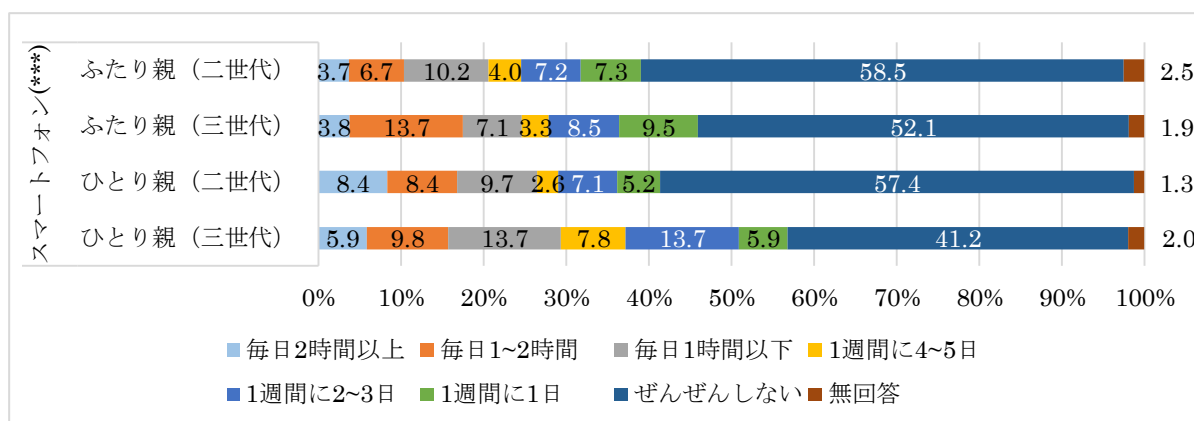
これらの情報機器の利用時間が「毎日2時間以上」と答えた子どもは、小学5年生では「パソコン」は 2.9%、「タブレット」は 4.8%、「スマートフォン」は 4.1%であった。中学2年生は、小学5年生に比べて、全ての機器において利用時間が長くなっており、「毎日2時間以上」は「パソコン」では 7.4%、「タブレット」は 8.6%、「スマートフォン」では 30.9%となっている。「スマートフォン」については、中学2年生の 58.2%が毎日1時間以上利用している。

図表 4-3-1 情報機器の利用状況(小学5年生、中学2年生)



これを世帯タイプ別に見ると、小学5年生では「スマートフォン」、中学2年生では「パソコン」と「スマートフォン」において有意な差が確認された。小学5年生にて、スマートフォンの利用が「毎日2時間以上」の子ども割合は、ひとり親(二世帯)世帯、ひとり親(三世帯)世帯、ふたり親(三世帯)世帯、ふたり親(二世帯)世帯の順に高い。特に、ひとり親(二世帯)世帯は 8.4%であり、1割近くが日常的にスマートフォンを利用している。ただし、ひとり親(二世帯)世帯にて「ぜんぜんしない」子どもの割合は 57.4%であり、二番目に高い。

図表 4-3-2 情報機器の利用状況(小学 5 年生):世帯タイプ別

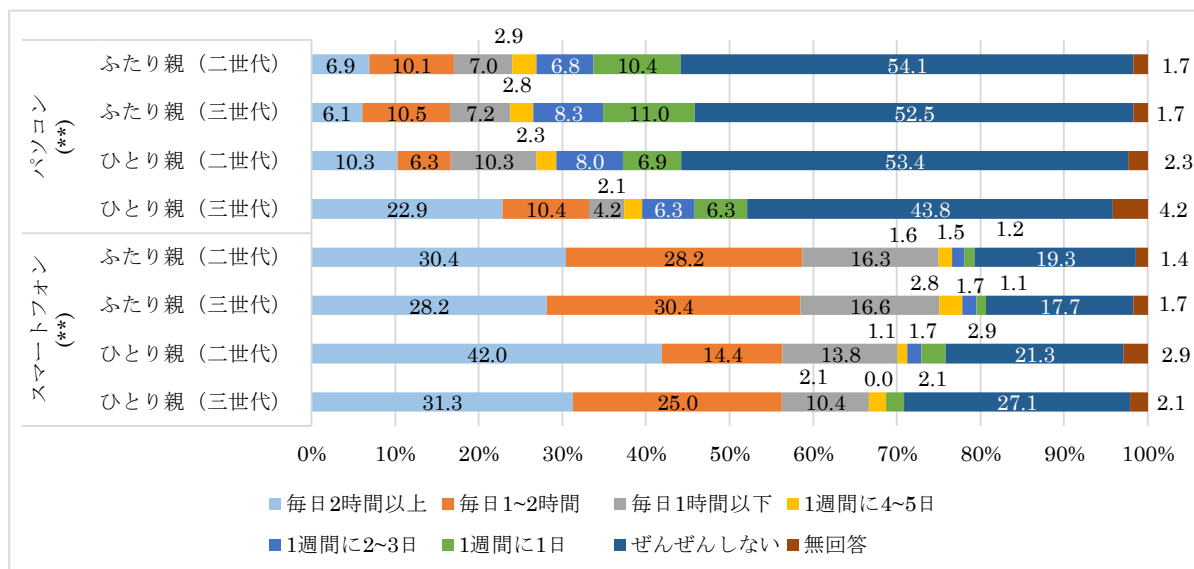


\*有意な結果のみ作表。

この傾向は、中学 2 年生のスマートフォンの利用状況においても確認される。中学 2 年生においても、「毎日 2 時間以上」の割合は、ひとり親 (二世帯) 世帯が 42.0%と最も高く、4 割以上である一方で、「ぜんぜんしない」の割合も 21.3%となっている。どの世帯タイプにおいても、「毎日 1~2 時間」以上「スマートフォン」を使う中学 2 年生の割合は、約 6 割であり、大きな差はない。

また、パソコンの利用状況については、「毎日 2 時間以上」の割合は、ひとり親 (三世帯) 世帯において最も高く 22.9%となっている。しかし、ひとり親 (三世帯) 世帯の子どもの 43.8%は「ぜんぜんしない」と答えており、長時間利用する子どもと全く利用しない子どもに二極化している。

図表 4-3-3 情報機器の利用状況(中学 2 年生):世帯タイプ別



\*有意な結果のみ作表。

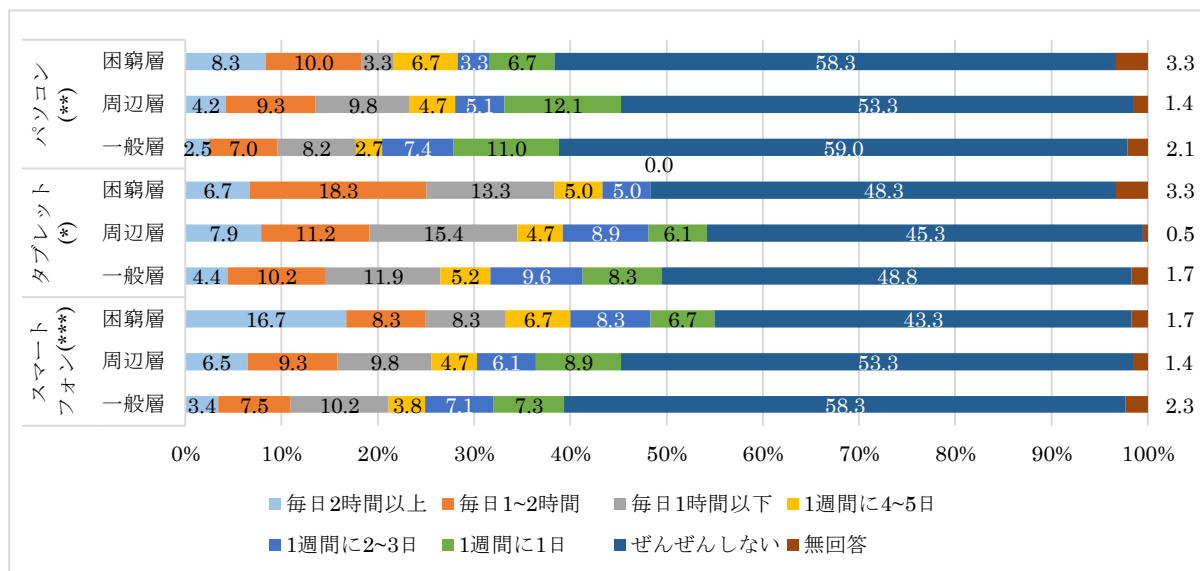
次に、生活困難度別に情報機器の利用状況を見ると、小学 5 年生では「パソコン」「タブレット」「スマートフォン」において、中学 2 年生では「スマートフォン」において有意な差が確認され

た。小学5年生の「パソコン」では、「毎日2時間以上」「毎日1~2時間以上」利用している子どもの割合は、困窮層において1番高かったが（「毎日2時間以上」8.3%、「毎日1~2時間」10.0%）、「ぜんぜんしない」の割合は周辺層において最も低かった（53.3%）。

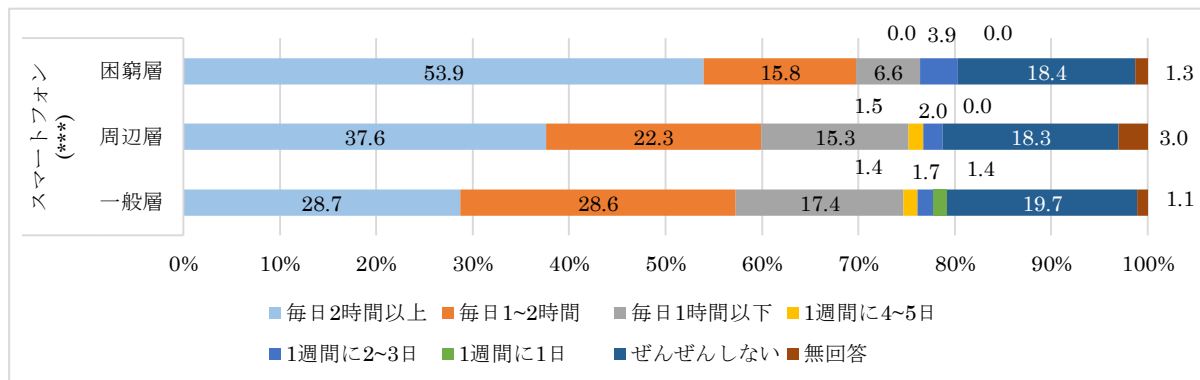
小学5年生の「タブレット」では、「毎日2時間以上」利用している子どもの割合が最も高いのは周辺層（7.9%）、毎日1時間以上利用している子どもの割合が最も高いのは困窮層（「毎日2時間以上」6.7%、「毎日1~2時間」18.3%）であり、「ぜんぜんしない」の割合が最も低いのも周辺層である。

「スマートフォン」については、両学年とも生活が困窮するほど「毎日2時間以上」利用している子どもの割合が高くなっている。さらに、小学5年生においては「ぜんぜんしない」の割合が、生活が困窮するほど低下している。中学2年生の困窮層の53.9%が「毎日2時間以上」スマートフォンを利用している。総じて、困窮層と周辺層は、一般層よりも情報機器を利用する傾向があり、その利用時間も長いと言える。

図表 4-3-4 情報機器の利用状況(小学5年生):生活困難度別



図表 4-3-5 情報機器の利用状況(中学2年生):生活困難度別

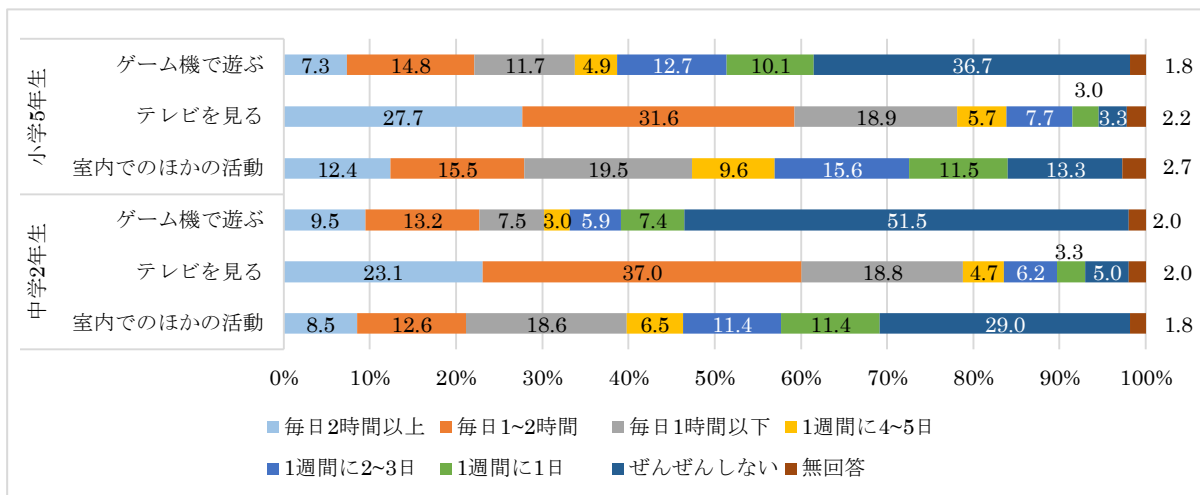


\*有意な結果のみ作表。

## (2) 屋内での活動

屋内での活動の状況を見ると、「ゲーム機で遊ぶ」は両学年とも「ぜんぜんしない」が最も大きな割合を占めている（小学5年生 36.7%、中学2年生 51.5%）一方で、「毎日2時間以上」ゲーム機で遊ぶ子どもも一定割合いる（小学5年生 7.3%、中学2年生 9.5%）。「テレビを見る」は、両学年とも「毎日1~2時間」が最も大きな割合を占めており（小学5年生 31.6%、中学2年生 37.0%）、それに「毎日2時間以上」が続く（小学5年生 27.7%、中学2年生 23.1%）。両学年とも6割弱の子どもが毎日1時間以上テレビを見ている。「室内でのほかの活動」は、小学5年生においては「無回答」を除いて最も割合の低い「1週間に1日」が9.6%、最も割合の高い「毎日1時間以下」が19.5%と、各選択肢間で極端に大きな差はなかったが、中学2年生においては「ぜんぜんしない」が29.0%であり、その他の選択肢よりも大きな割合を占めていた。

図表 4-3-6 屋内での活動状況(小学5年生、中学2年生)

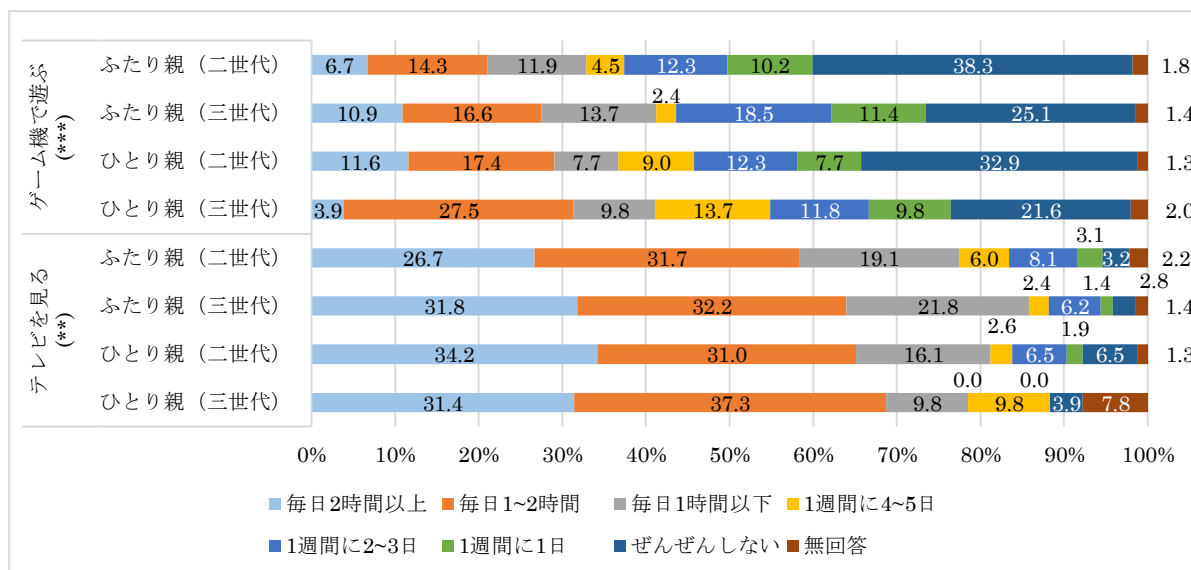


世帯タイプ別に見ると、小学5年生では「ゲーム機で遊ぶ」と「テレビを見る」において、中学2年生では「ゲーム機で遊ぶ」「テレビを見る」「室内でのほかの活動」において有意な差が確認された。「ゲーム機で遊ぶ」は「毎日2時間以上」の割合は、小学5年生ではひとり親（二世帯）世帯、ふたり親（三世帯）世帯にて高く、中学2年生においては、ひとり親（三世帯）世帯、ひとり親（二世帯）世帯が高かった。

「テレビを見る」については、「毎日2時間以上」と「毎日1~2時間以上」を足し合わせた割合が、小学5年生では、ひとり親（三世帯）世帯、ひとり親（二世帯）世帯、ふたり親（三世帯）世帯、ふたり親（二世帯）世帯の順に高いのに対し、中学2年生では反対にふたり親（二世帯）世帯、ふたり親（三世帯）世帯、ひとり親（二世帯）世帯、ひとり親（三世帯）世帯の順に高かった。

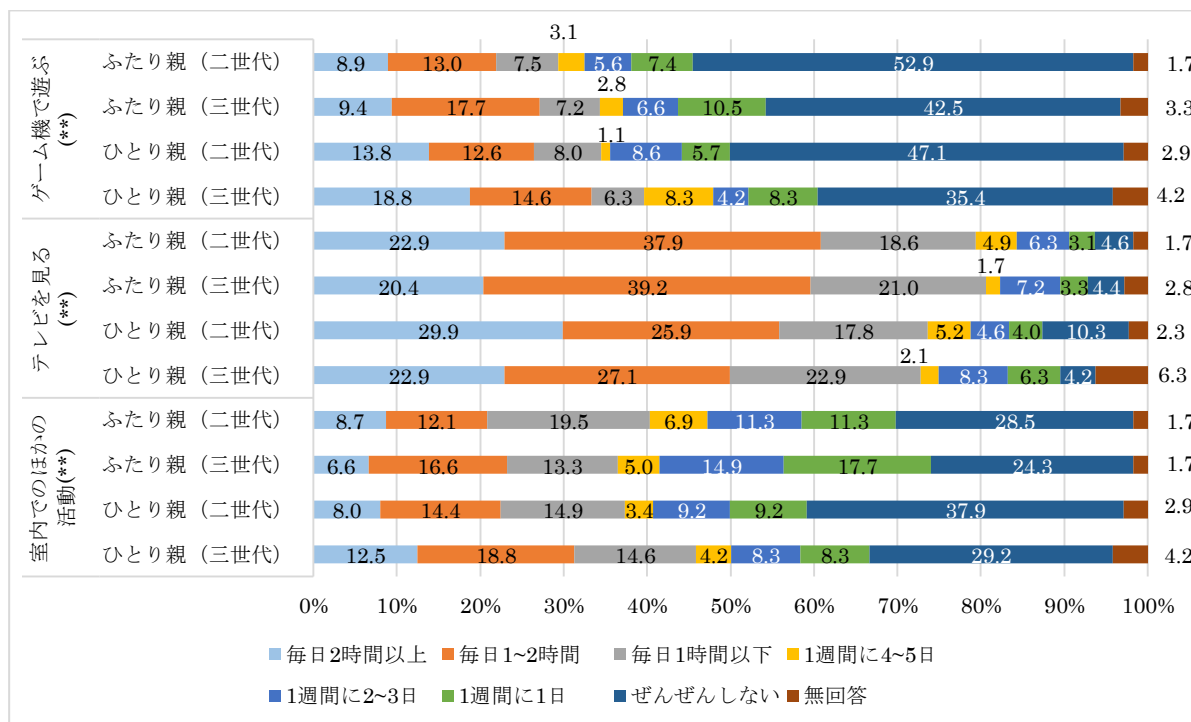
中学2年生の「室内でのほかの活動」については、「毎日2時間以上」の割合がひとり親（三世帯）世帯にて最も高く、「毎日1~2時間」を含めると、3割以上の子どもが該当した。

図表 4-3-7 屋内での活動状況(小学 5 年生):世帯タイプ別



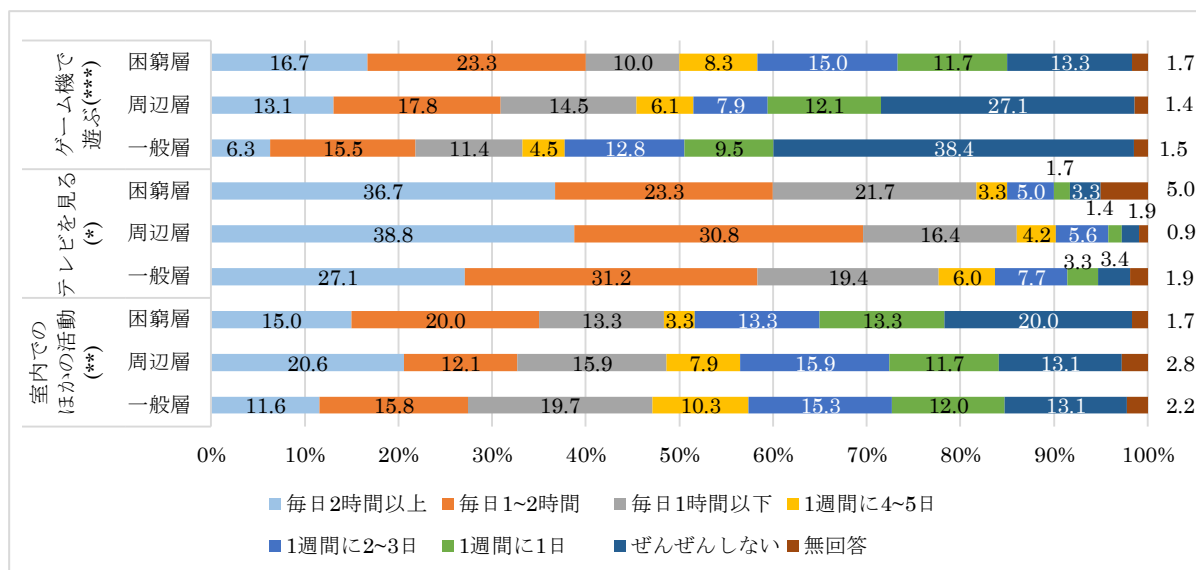
\*有意な結果のみ作表。

図表 4-3-8 屋内での活動状況(中学 2 年生):世帯タイプ別



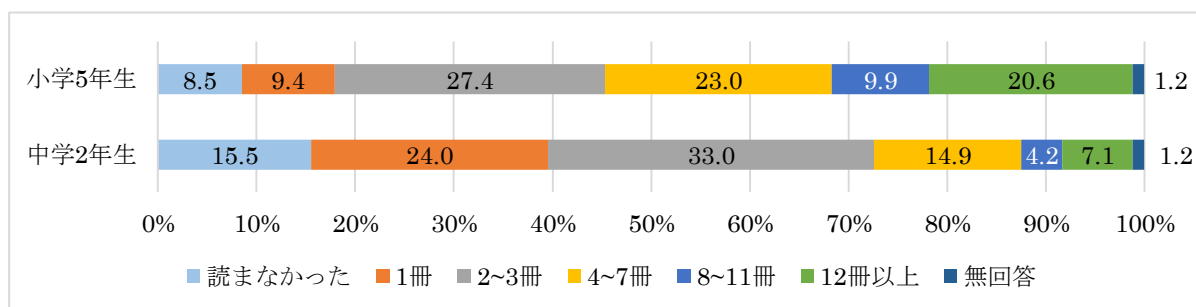
生活困難度別に見ると、小学 5 年生においては、全ての活動にて有意な差が確認されたが、中学 2 年生においてはどれも確認されなかった。小学 5 年生では、全ての活動内容について「毎日 2 時間以上」が占める割合が、一般層において最も小さい。これは「毎日 2 時間以上」と「毎日 1~2 時間」を足し合わせても同様であり、生活困難層は一般層よりも、これらの活動時間が長くなっている。

図表 4-3-9 屋内での活動状況(小学 5 年生):生活困難度別



屋内での活動のうち、特に読書については子ども票にて最近1か月の読書冊数を訊いている(自宅以外で読んだ本や電子書籍も含む。雑誌・マンガは含まない)。その結果、本を「読まなかった」と回答した子どもの割合は、小学5年生で8.5%、中学2年生で15.5%であり、およそ8割から9割の子どもが少なくとも1冊以上の本を読んでいた。両学年とも「2~3冊」の割合が最も高く、小学5年生は27.4%、中学2年生は33.0%を占める。

図表 4-3-10 この1か月で読んだ本の冊数(小学5年生、中学2年生)

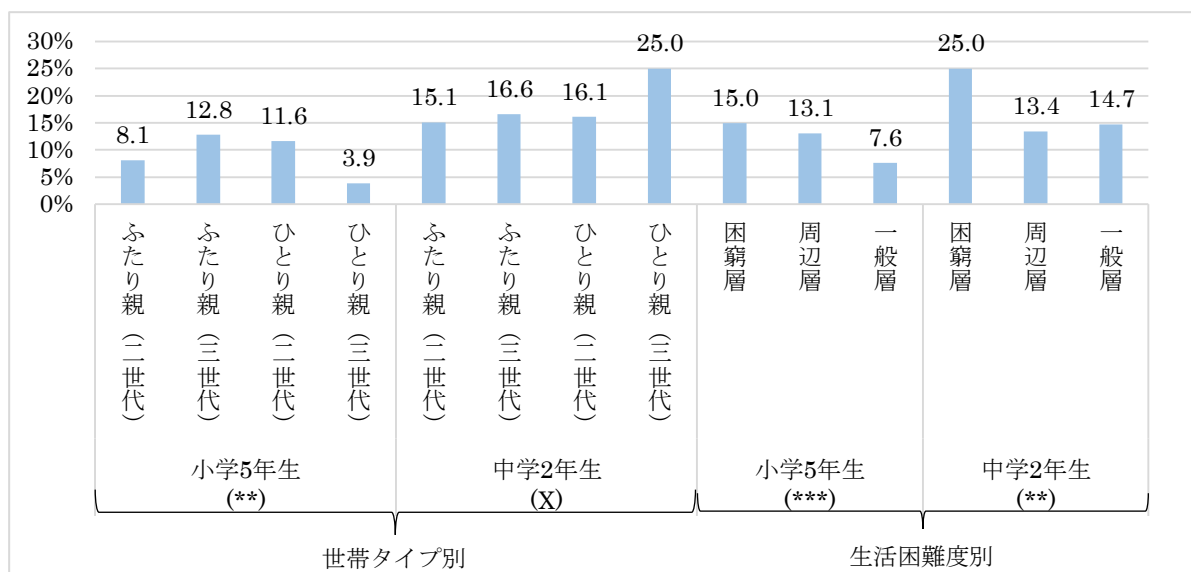


\*漫画、雑誌は除く。

最近1か月の間に本を「読まなかった」と回答した子どもの割合を世帯タイプ別に見ると、小学5年生のみにて有意な差が確認された。その割合は、ふたり親(二世帯)世帯(8.1%)、ふたり親(三世帯)世帯(12.8%)、ひとり親(二世帯)世帯(11.6%)、ひとり親(三世帯)世帯(3.9%)であった。

生活困難度別に見ると、両学年とも有意な差が確認された。本を「読まなかった」子どもの割合は困窮層において最も高く、特に中学2年生においては25.0%の困窮層が最近1か月の間に1冊も本を読んでいない。

図表 4-3-11 この1か月で本を読まなかった子どもの割合(小学5年生、中学2年生):世帯タイプ別、生活困難度別

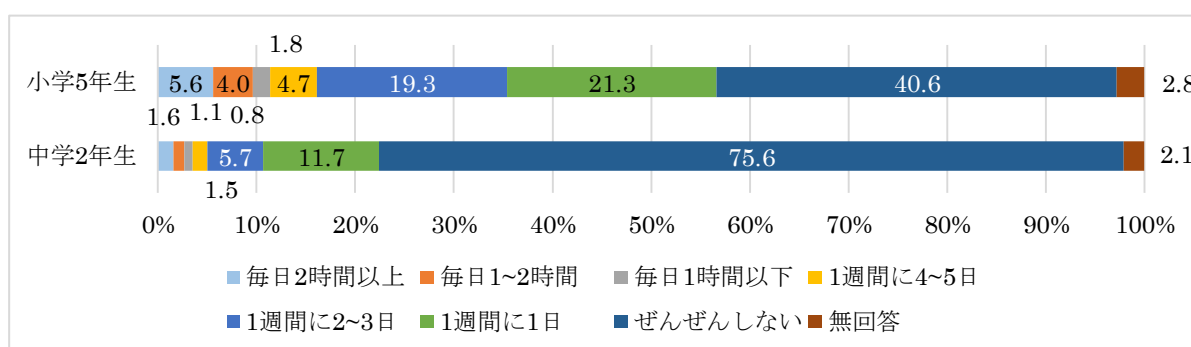


\* 「読まなかった」とそれ以外に分類した上で、検定を行っているため、検定結果が付表と一致しないことがある。

### (3) 屋外での活動

次に、屋外での活動について「公園で遊ぶ頻度」と「体を動かす遊びや習い事の頻度」を子ども本人の回答から見る。公園で遊ぶ頻度を見たところ、「ぜんぜんしない」と回答した子どもの割合は、小学5年生は40.6%、中学2年生は75.6%であった。小学5年生においては約6割の子どもが週に1回以上、公園で遊んでいるが、中学2年生ではこの割合は2割強にとどまる。小学5年生においては、「毎日2時間以上」と答えた子どもは5.6%、「毎日1~2時間」も含めると、約1割の子どもが公園で遊んでいる。

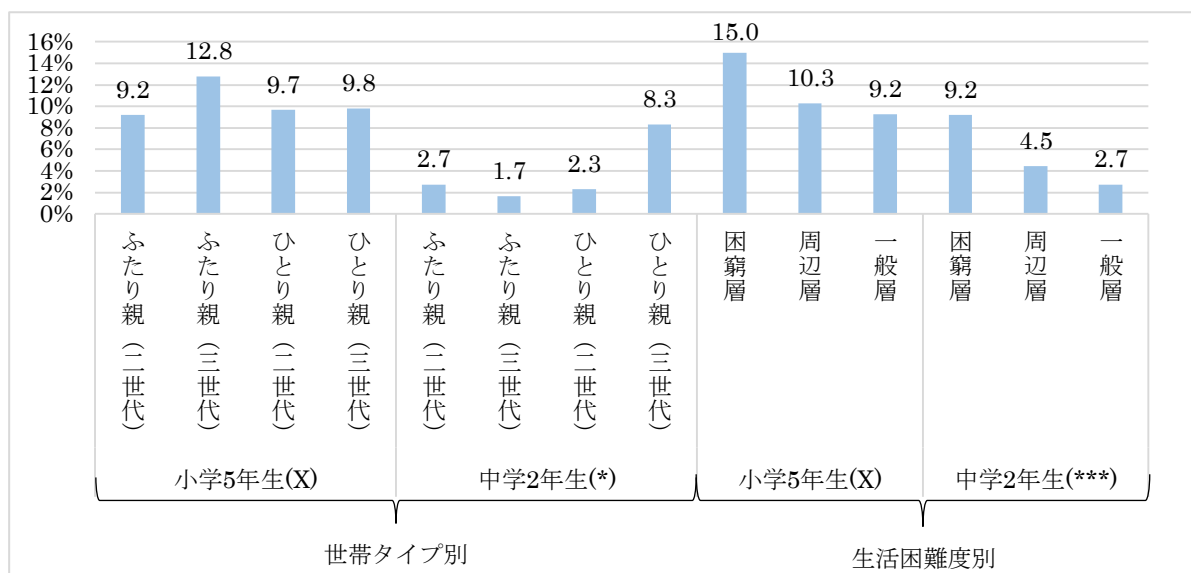
図表 4-3-12 公園で遊ぶ(小学5年生、中学2年生)



世帯タイプならびに生活困難度別に、公園で毎日1時間以上遊ぶ子ども(「毎日2時間以上」と「毎日1~2時間」と回答した子ども)の割合を見ると、中学2年生では世帯タイプ別、生活困難度別の有意な差が確認された。中学2年生では、ひとり親(三世帯)世帯の子どもは8.3%が毎日1時間以上公園で遊んでおり、他の世帯タイプよりその割合が高い。また、中学2年生の困窮層

の9.2%が毎日1時間以上公園で遊んでおり、その割合は周辺層の約2倍、一般層の約3倍である。小学5年生は世帯タイプ別、生活困難度別ともに有意な差は確認されなかったが、困窮層における毎日1時間以上遊ぶ子どもの割合は15.0%である。

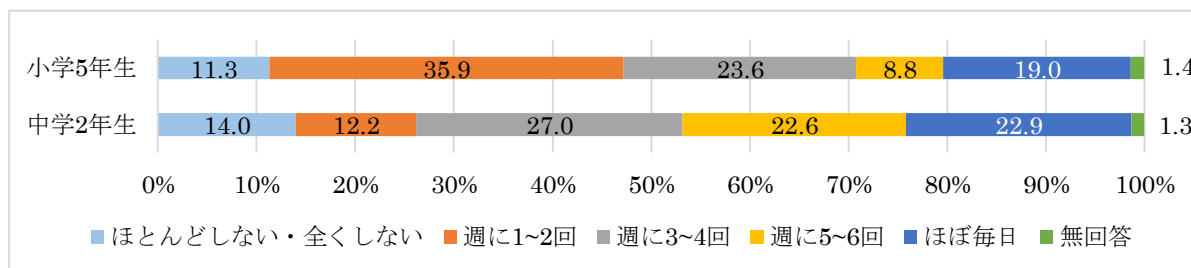
図表 4-3-13 公園で毎日1時間以上遊ぶ子どもの割合(小学5年生、中学2年生):世帯タイプ別、生活困難度別



\* 「毎日2時間以上」ならびに「毎日1~2時間」とそれ以外に分類した上で、検定を行っているため、検定結果が付表と一致しないことがある。

「30分以上体を動かす遊びや習い事をする頻度」を見ると、小学5年生では「週に1~2回」が35.9%、中学2年生では「週に3~4回」が27.0%で最も大きな割合を占めていた。また、「ほぼ毎日」と回答した子どもも、小学5年生では19.0%、中学2年生では22.9%と約2割を占めている。その一方、「ほとんどしない・全くしない」と答えた子どもも、小学5年生では11.3%、中学2年生では14.0%おり、日常的に運動をする層としない層に分かれている。

図表 4-3-14 30分以上体を動かす遊びや習い事をする頻度(小学5年生、中学2年生)

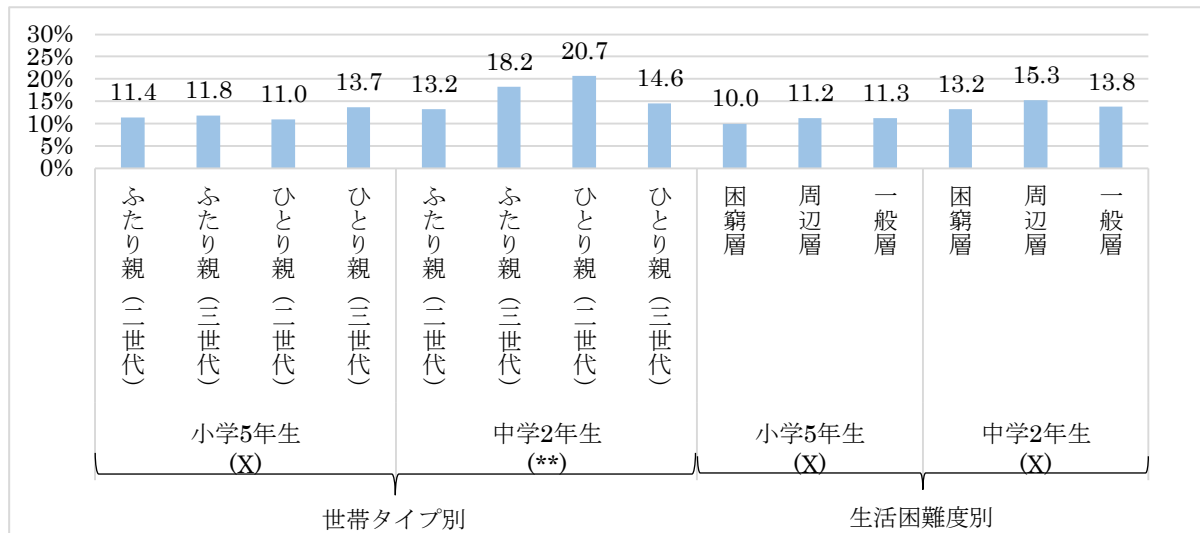


30分以上体を動かす遊びや習い事を「ほとんどしない・全くしない」子どもの割合を世帯タイプ別、生活困難度別に見ると、中学2年生の世帯タイプ別においてのみ、有意な差が確認された。中学2年生の30分以上の運動を「ほとんどしない・全くしない」子どもの割合は、ふたり親(二



世代)世帯(13.2%)、ふたり親(三世帯)世帯(18.2%)、ひとり親(二世帯)世帯(20.7%)、ひとり親(三世帯)世帯(14.6%)であり、ひとり親(二世帯)世帯が最も高かった。

図表 4-3-15 30分以上体を動かす遊びや習い事を「ほとんどしない・全くしない」子どもの割合(小学5年生、中学2年生):世帯タイプ別、生活困難度別



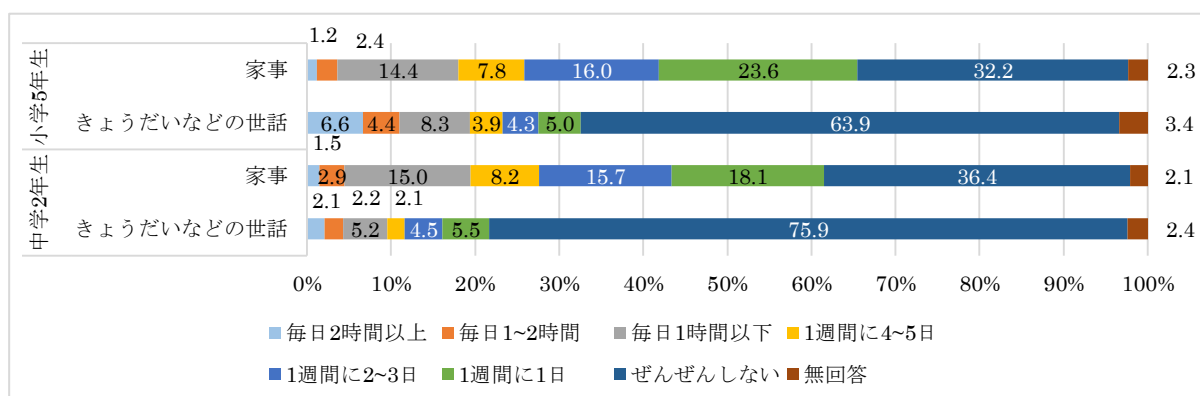
\* 「ほとんどしない・全くしない」とそれ以外に分類した上で、検定を行っているため、検定結果が付表と一致しないことがある。

#### (4) 家事・家族の世話

「家事」の頻度を見ると、小学5年生の32.2%、中学2年生の36.4%が「ぜんぜんしない」と答えている。両学年ともに6割強の子どもが少なくとも週に1日以上家事をしており、「毎日2時間以上」「毎日1~2時間」「毎日1時間以下」を合わせると、小学5年生では18.0%が、中学2年生では19.4%が毎日、家事をしていることになる。

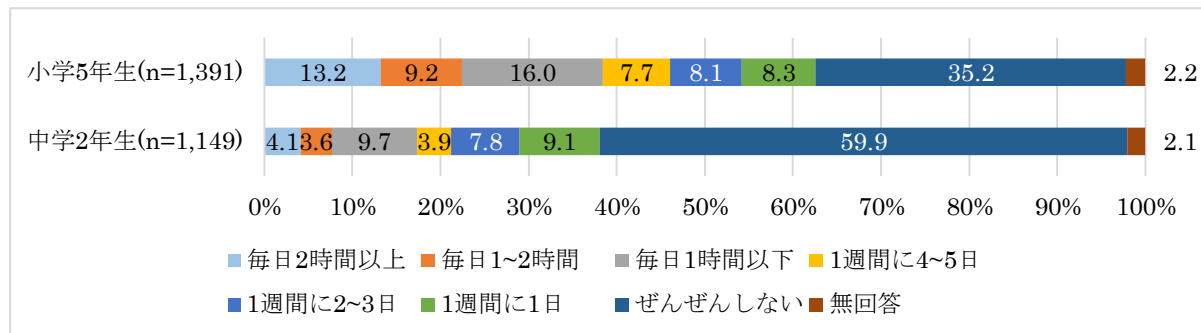
「きょうだいなどの世話」の頻度を見ると、小学5年生の63.9%、中学2年生の75.9%が「ぜんぜんしない」と答えている。すなわち、小学5年生の3割強、中学2年生の2割強が少なくとも週に1日以上、きょうだいなどの世話をしていることになる。

図表 4-3-16 「家事」・「きょうだいなどの世話」の頻度(小学5年生、中学2年生)



兄弟姉妹のうち、年長の者が年少の者を世話をすることが一般的であることを踏まえ、回答者を弟もしくは妹のいる者に限って「きょうだいなどの世話」の頻度を見ると、小学5年生においては「ぜんぜんしない」の割合が大きく低下し35.2%となった一方、中学2年生においては低下の幅は相対的に小さく59.9%であった。

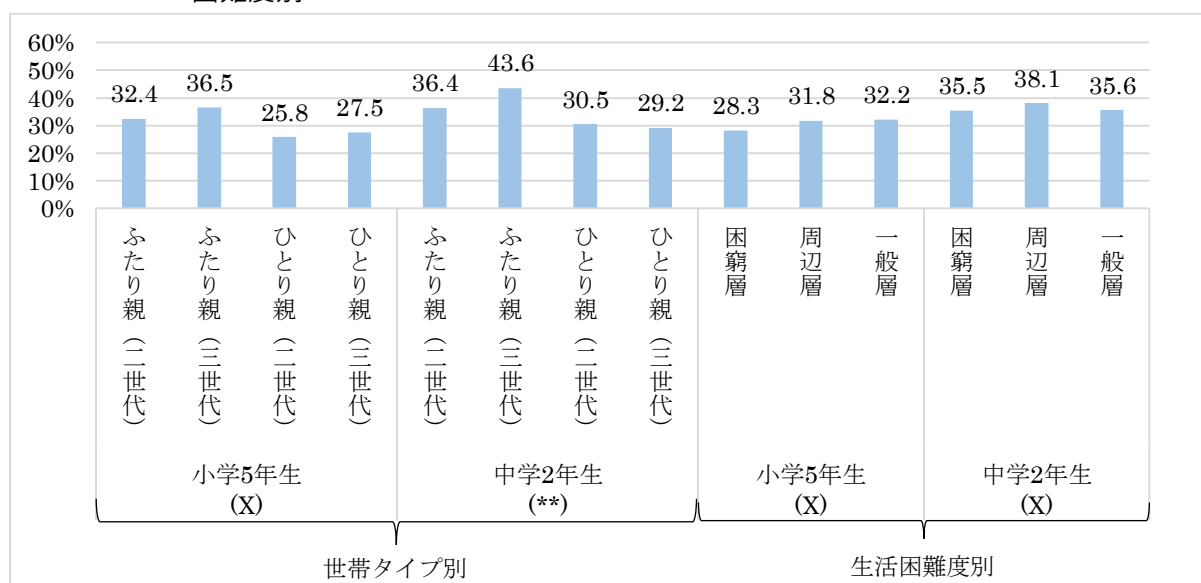
図表 4-3-17 弟もしくは妹がいる子どもの「きょうだいなどの世話」の頻度(小学5年生、中学2年生)



\*子ども票回答者に弟もしくは妹がいるケースのみにて作表。

家事を「ぜんぜんしない」子どもの割合を世帯タイプ別ならびに生活困難度別に見ると、中学2年生の世帯タイプにおいてのみ有意な差が確認された。その割合は、ふたり親(三世帯)世帯(43.6%)、ふたり親(二世帯)世帯(36.4%)、ひとり親(二世帯)世帯(30.5%)、ひとり親(三世帯)世帯(29.2%)となっており、世帯内の大人の数が多いと考えられるふたり親(三世帯)世帯において最も高く、続いてふたり親(二世帯)世帯が高い。また、小学5年生においても統計的には有意でないものの同様の傾向が見取れる。ひとり親世帯の子どもは、ふたり親世帯の子どもよりも家事をすることが多いと考えられる。

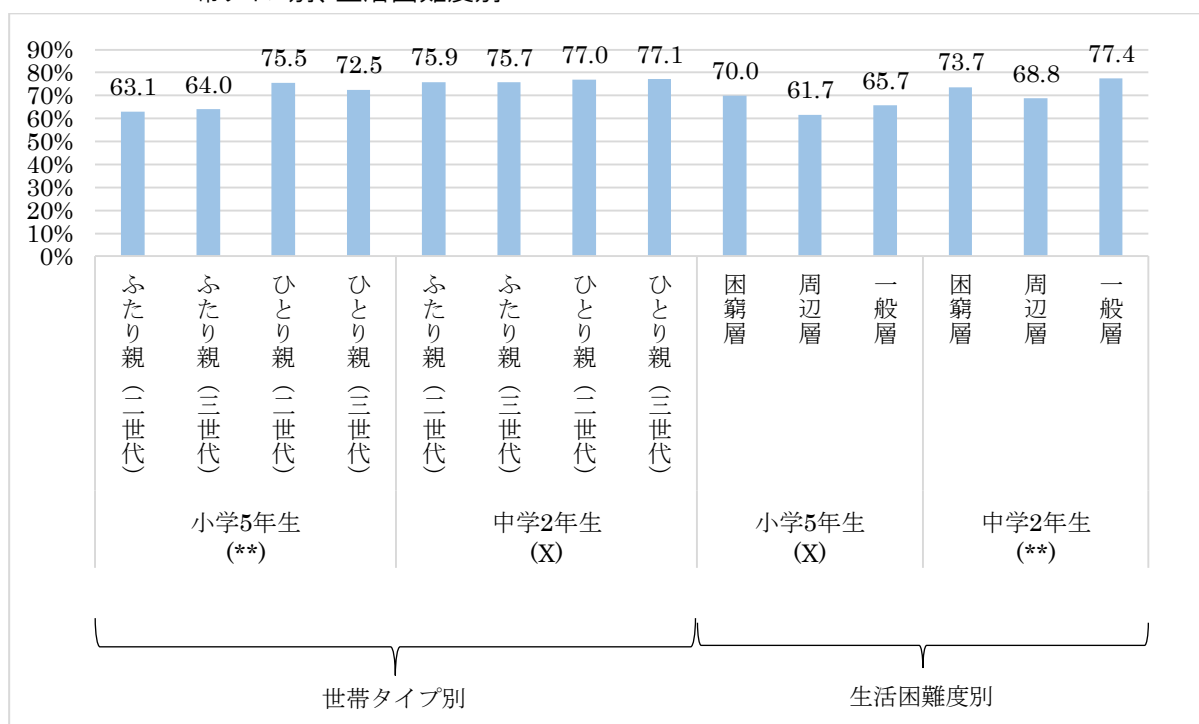
図表 4-3-18 「家事」を「ぜんぜんしない」子どもの割合(小学5年生、中学2年生):世帯タイプ別、生活困難度別



\*「ぜんぜんしない」とそれ以外に分類した上で、検定を行っているため、検定結果が付表と一致しないことがある。

「きょうだいなどの世話」を「ぜんぜんしない」と答えた子どもの割合を世帯タイプ別ならびに生活困難度別に見ると、小学5年生の世帯タイプ、中学2年生の生活困難度において有意な差が確認された。小学5年生の「ぜんぜんしない」割合は、ふたり親(二世帯)世帯(63.1%)、ふたり親(三世帯)世帯(64.0%)、ひとり親(二世帯)世帯(75.5%)、ひとり親(三世帯)世帯(72.5%)であり、ひとり親世帯よりもふたり親世帯の子どもの方が、他の家族の世話をする人が多い。また、中学2年生の割合は、困窮層73.7%、周辺層68.8%、一般層77.4%である。大きな差ではないが、困窮層、周辺層の子どもは、一般層よりも他の家族の世話をする人が多いと考えられる。

図表 4-3-19 「きょうだいなどの世話」を「ぜんぜんしない」子どもの割合(小学5年生、中学2年生):世帯タイプ別、生活困難度別



\*世帯タイプ、生活困難度によっては弟もしくは妹のいる子どもの数が極端に少なくなるため、弟もしくは妹のいる子どもに限っての分析は行わない。

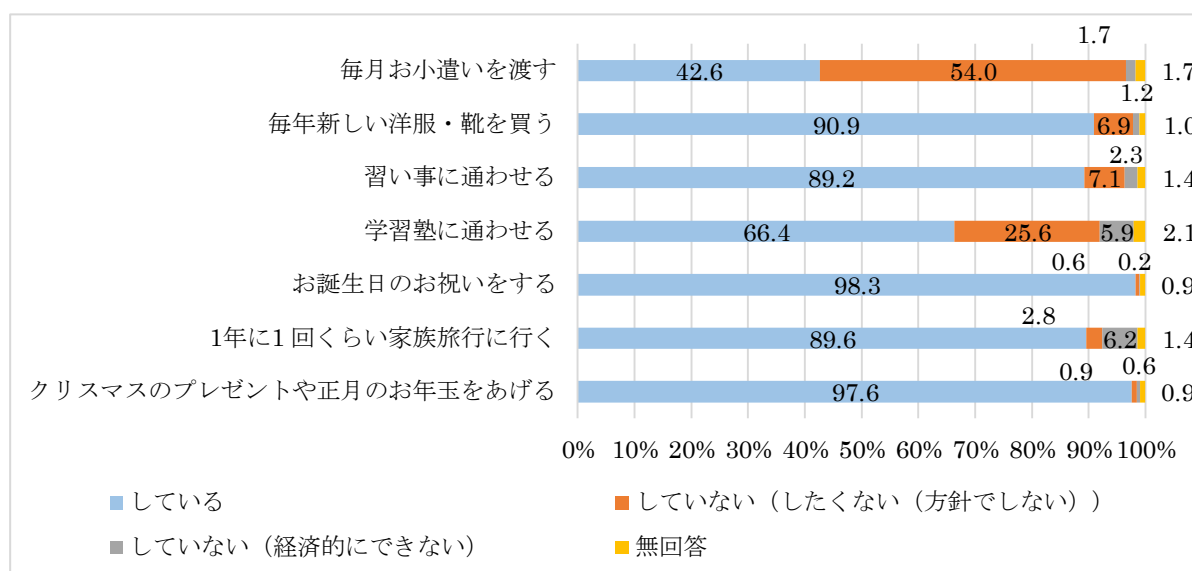
\*「ぜんぜんしない」とそれ以外に分類した上で、検定を行っているため、検定結果が付表と一致しないことがある。

#### 4. 子どものための支出

一般的に子どものために支出されている7つ項目（「毎月お小遣いを渡す」「毎年新しい洋服・靴を買う」「習い事に通わせる」「学習塾に通わせる」「お誕生日のお祝いをする」「1年に1回くらい家族旅行に行く」「クリスマスのプレゼントや正月のお年玉をあげる」）について、保護者にそれらを支出しているかを訊いた。すると、両学年ともに、「お誕生日のお祝い」や「クリスマスのプレゼント・お年玉」については、95%を超える保護者が支出している。また、「毎年新しい洋服・靴」「1年に1回くらい家族旅行」も8割から9割の保護者が「支出している」と答えている。「お小遣い」については、小学5年生では42.6%、中学2年生では62.8%が支出している。

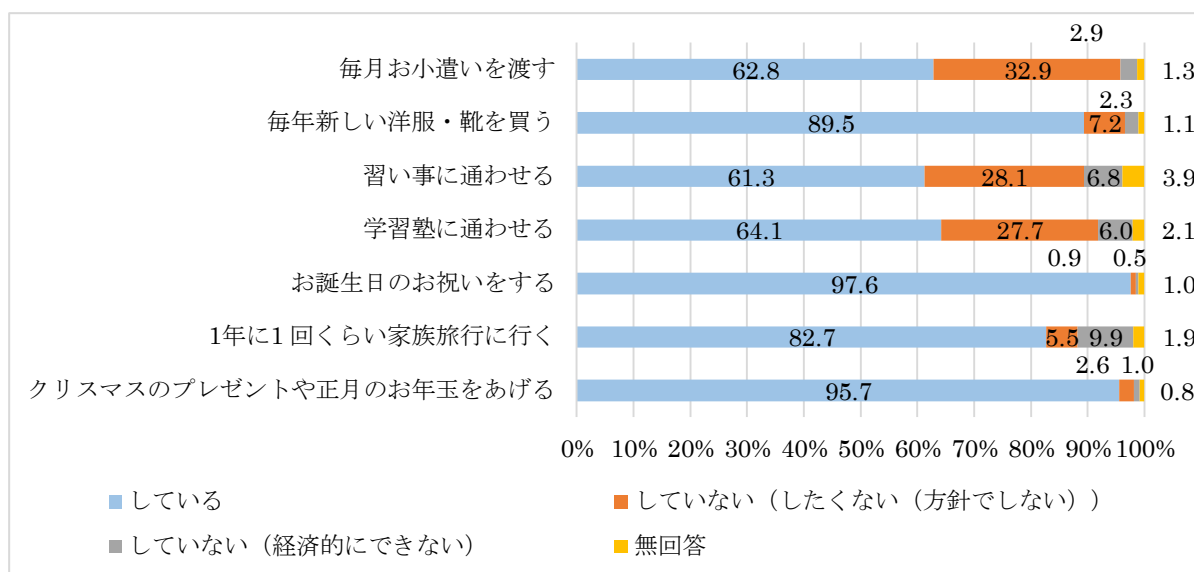
支出が「経済的にできない」と答えた保護者が多かった項目は、「1年に1回くらい家族旅行に行く」（小学5年生6.2%、中学2年生9.9%）、「学習塾に通わせる」（小学5年生5.9%、中学2年生6.0%）、「習い事に通わせる」（小学5年生2.3%、中学2年生6.8%）であった。

図表 4-4-1 子どものための支出(小学5年生)



\*以下、「学習塾に通わせる」には家庭教師をつけることも含む。「習い事」は音楽、スポーツ、習字など。

図表 4-4-2 子どものための支出(中学 2 年生)

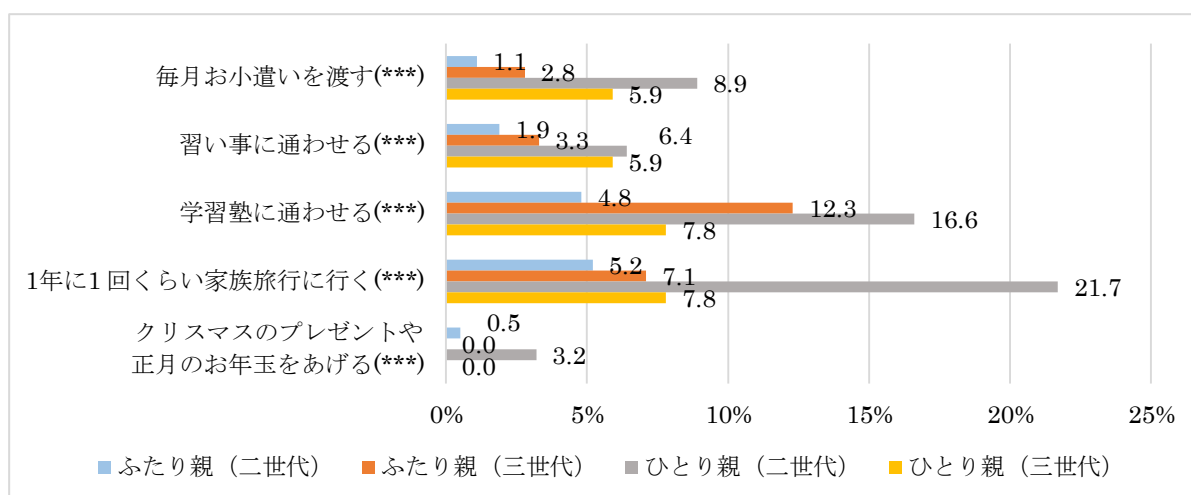


小学 5 年生の「していない (経済的にできない)」の割合を世帯タイプ別に見ると、「毎年新しい洋服・靴を買う」や「お誕生日のお祝いをする」は世帯タイプによる差が見られなかったが、「毎月お小遣いを渡す」(以下、「お小遣い」と表記)、「習い事に通わせる」(以下、「習い事」と表記)、「学習塾に通わせる」(以下、「学習塾」と表記)、「1年に1回くらい家族旅行に行く」(以下、「家族旅行」と表記)、「クリスマスのプレゼントや正月のお年玉をあげる」(以下、「クリスマスプレゼント・お年玉」と表記)において統計的な差が確認された。

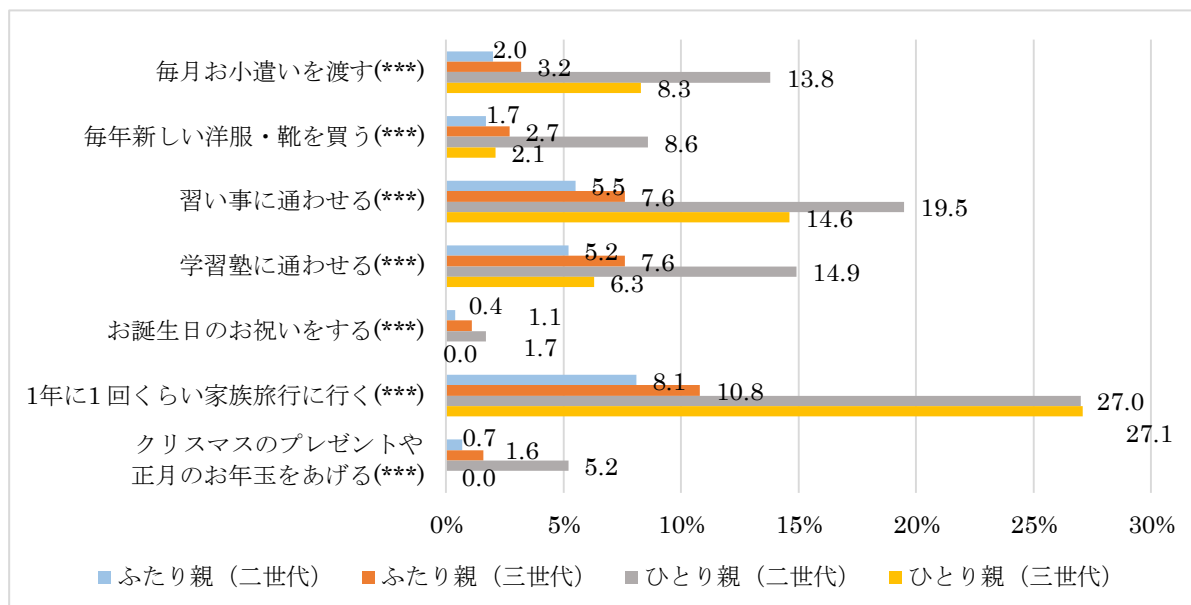
これらの支出について「していない (経済的にできない)」と答えた保護者の割合は、ひとり親 (二世帯) 世帯が最も高い。年 1 回とはいえ比較的支出金額の大きい家族旅行やクリスマスプレゼント・お年玉、あるいは学習塾、習い事といった子どもの教育、さらにお小遣いといった定期的な支出が、ひとり親 (二世帯) 世帯の保護者にとっては負担となる傾向にある。特に年 1 回の家族旅行、子どもの学習塾への支出が経済的な理由でできないという、ひとり親 (二世帯) 世帯の割合は、それぞれ 21.7%、16.6%であった。

これに加え、中学 2 年生においては「お誕生日のお祝いをする」「毎年新しい洋服・服を買う」においても有意な差が確認された。「していない (経済的にできない)」の割合を見ると、家族旅行以外は、ひとり親 (二世帯) 世帯における割合が最も高い。また、年 1 回の家族旅行についても、経済的にできないひとり親 (二世帯) 世帯の割合は 27.0%であり、最も高いひとり親 (三世帯) 世帯 27.1%とほとんど同じである。さらに、有意な差のあった項目のうち、「毎年新しい洋服・服を買う」「学習塾に通わせる」「お誕生日のお祝いをする」以外の項目の経済的にできない世帯の割合は、小学 5 年生より中学 2 年生の方が高い。

図表 4-4-3 「経済的にできない」子どものための支出(小学5年生):世帯タイプ別



図表 4-4-4 「経済的にできない」子どものための支出(中学2年生):世帯タイプ別

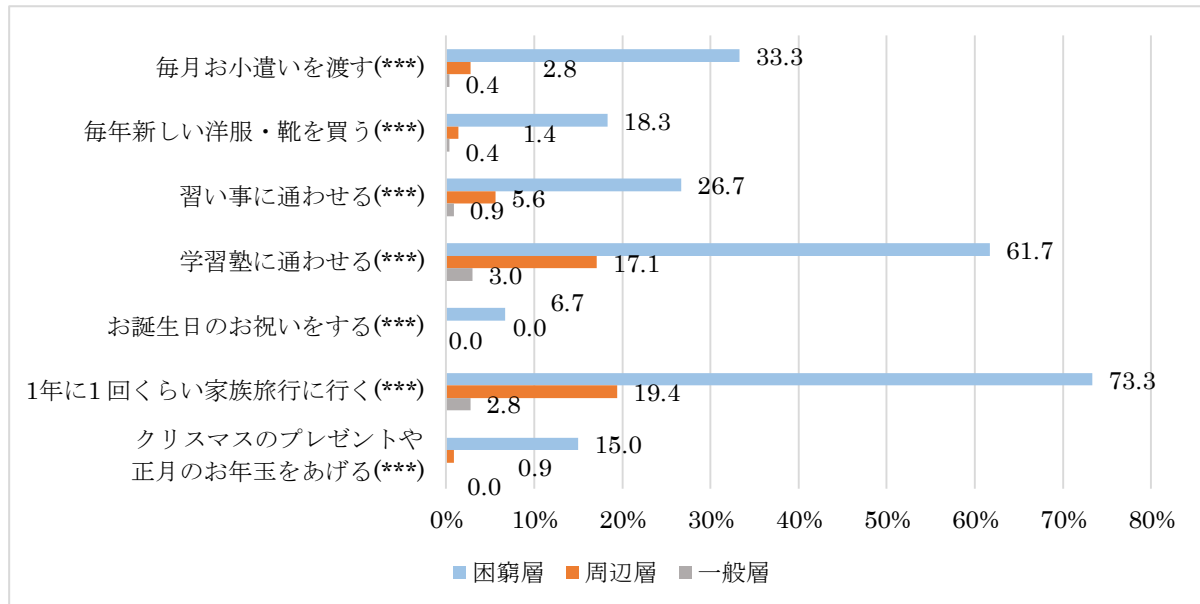


子どもに対する支出について生活困難度別に見ると、両学年とも全ての項目において生活困難度による有意な差が確認された。中学2年生の誕生日以外は、生活が困窮するほど、子どもに対する支出が経済的にできなくなっている。中学2年生の誕生日についても、経済的にできない割合は、困窮層 2.6%、周辺層 3.4%、一般層 0.0%であり、世帯の経済状況との関わりが伺える。

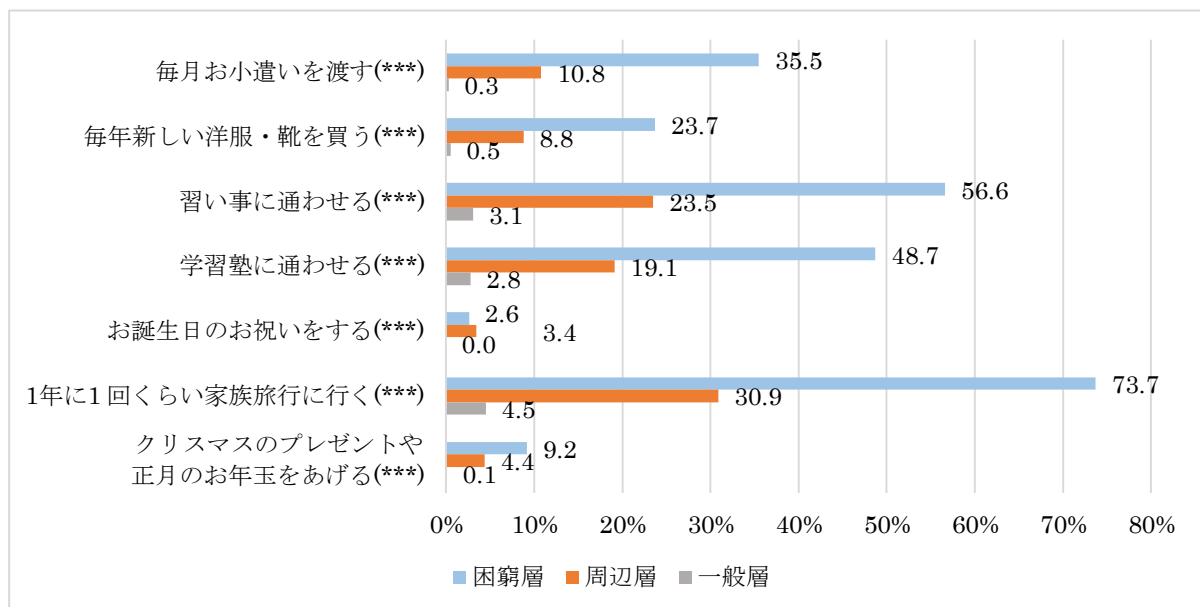
特に家族旅行については困窮層の約7割(小学5年生 73.3%、中学2年生 73.7%)が経済的な理由により行っていない。また、多くの子どもたちが年に一回訪れることを楽しみにしているであろう、クリスマスや正月についても、経済的な理由からプレゼントやお年玉への支出を控える世帯が困窮層の中には一定数いる(小学5年生 15.0%、中学2年生 9.2%)。さらに、学習塾(小学5年生 61.7%、中学2年生 48.7%)や習い事(小学5年生 26.7%、中学2年生 56.6%)といった学校外教育に対する支出を控える保護者の割合も高い。そして、世帯タイプ別には小学5年生

においては有意な差が確認されなかった「毎年新しい洋服・靴を買う」ことについても、「していない（経済的にできない）」世帯が困窮層の約2割（小学5年生18.3%、中学2年生23.7%）を占めている。

図表 4-4-5 「経済的にできない」子どものための支出(小学5年生):生活困難度別



図表 4-4-6 「経済的にできない」子どものための支出(中学2年生):生活困難度別



## 5. まとめ

### (1) 子どもの食

子どもの食生活については、小学5年生は困窮層とひとり親（二世帯）世帯、中学2年生はそれらに加えひとり親（三世帯）世帯において、朝食の頻度が低くなる傾向があった（図表 4-1-2、図表 4-1-3）。また、朝食や夕食を1人で食べることのある子どもも一定程度おり（図表 4-1-4、図表 4-1-5、図表 4-1-6、図表 4-1-7）、食事の内容の面でも世帯の状況に応じた差があった。特に、小学5年生の困窮層において、給食以外でも毎日野菜を食べている子どもの割合が6割にとどまったこと、果物について「食べない」と回答した子どもも1割いることは注目に値する（図表 4-1-14）。すなわち、世田谷区においても子どもにおける食の格差が確認できる。

日本においては、世帯の経済状況によって子ども期に食格差があることは学術的にも確認されており、特に、たんぱく質、ビタミン類、ミネラル等の摂取量に格差があることがわかっている。これを踏まえると、食格差に対する積極的な支援は世田谷区でも有効であろう。特に、小中学校における給食は多くの子どもに届く重要なツールであり、給食にて野菜等を豊富に提供することは、野菜等を食べる食習慣をつける意義もあり、大人になってからの食生活にも影響すると考えられる。

また、注目されている「子ども食堂」については、困窮層などにとどまらず、全ての層・世帯タイプの子どもの利用意向が確認された（図表 4-1-16）。一方で、小学5年生の困窮層ならびにひとり親（三世帯）世帯においては約5割と高いニーズがある（図表 4-1-17、図表 4-1-18）。すなわち、子ども食堂は普遍的な支援サービスとして、さまざまな子どものニーズを満たすことができ、かつ、特に食に関する支援サービスが必要な子どもにも有益である。

しかしながら、子ども食堂の実施頻度は限られているため、野菜のような日常的に摂取することが求められる食品を家庭において摂取できていない状況を踏まえると、江戸川区が実施する「おうち食堂」事業のような、支援者が子どものいる世帯に出向いて調理をするような支援、文京区の「子ども宅食」事業など、さまざまな支援策を準備するべきであろう。

### (2) 子どもの所有物

子どもの所有物を見ると「パソコン、タブレット」を持っている子どもの割合が約7割~8割、「携帯電話、スマートフォン」も約6割~8割と子どもたちにとって情報機器が身近な存在であることが伺える（図表 4-2-1）。特に「携帯電話、スマートフォン」については、生活困難度による所有状況の差が両学年とも確認されなかった（図表 4-2-4、図表 4-2-5）。反対に、世帯の状況による差が大きかったのは子ども部屋である。小学5年生においては困窮層の約4割、中学2年生においては約3割が、子どもだけの部屋を欲していた。また、子ども部屋よりも割合は低いものの、小学5年生においては困窮層の約1割、中学2年生においては約5%が自分の本を持っておらず、欲しいと答えている。

### (3) 子どもの日常的な活動

子どもたちが日常的に行っている活動を見ると、パソコン、タブレット、スマートフォンの利用については、全体として1日2時間以上利用している子どもの割合が、ひとり親世帯と困窮層



において高い傾向があった（図表 4-3-2～図表 4-3-5）。特に中学 2 年生の困窮層においては約 5 割の子どもが 1 日 2 時間以上、スマートフォンを利用している。ヒアリング調査でも教育関係者より情報機器の過度の利用に対する懸念が示されており、より詳細な分析が求められる。すなわち、これらの子どもたちがスマートフォンを長時間利用していることが、部活などの他の活動の選択肢がないからなのか、または、世帯タイプや親の就労状況によって親が不在の時間が長いからなのか等見極めた上で、例えば、他の活動ができる居場所を地域に設けることによってネット依存などのリスクを緩和することができるかの検討がつくであろう。

他にも、読書習慣について生活困難度による顕著な差が見られた（図表 4-3-11）。最近 1 か月で本を 1 冊も読まなかった子どもの割合が、困窮層において最も高く、特に中学 2 年生では一般層 14.7%、周辺層 13.4%に対し、困窮層は 25.0%であった。読書の差についても、それが、物質的な制約によるものか、時間的な制約によるものか、または、年少時からの読書習慣によるものかによって対応策が異なるため、その見極めが求められる。

#### （４）子どものための支出

子どもための支出を見ると、ほとんど全ての項目において世帯タイプと生活困難度による差が見られた。ふたり親世帯に比べて、ひとり親世帯、一般層に比べて、周辺層や困窮層において、経済的な理由から子どものための支出をできないと回答した保護者の割合が高かった（図表 4-4-3～図表 4-4-6）。特に、困窮層における「学習塾に通わせる」（小学 5 年生困窮層 61.7%、中学 2 年生困窮層 48.7%）、「習い事に通わせる」（小学 5 年生困窮層 26.7%、中学 2 年生困窮層 56.6%）といった定期的な教育費の支出ができない保護者の割合の高さは注目に値する。これらの値は世帯タイプ別で見た際のひとり親世帯における割合よりも高い。現在、世田谷区ではひとり親世帯の子どもや生活困窮世帯の子どもを対象とした無料学習支援事業を行っている。これらの無料学習支援事業は学習習慣の定着や子どもの居場所となることを目的としているため、学習塾や習い事と同機能であるとはいえないが、特に生活が困窮しているふたり親世帯の子どもが支援から漏れている可能性がある。

また、小学 5 年生では、一般層においては 0.0%であった子どもの誕生日のお祝い、クリスマスプレゼント、お年玉に支出できない保護者の割合が、困窮層においては 1 割程度いる（図表 4-4-5）。これらの支出は、一般層においては「当たり前」に行われており、子ども同士の会話や学校においても話題にあがると考えられる。ヒアリング調査では、夏休みに旅行などの体験ができない子どもへの配慮が語られていたが、クリスマス、お誕生日などについても同様の配慮が必要であろう。